

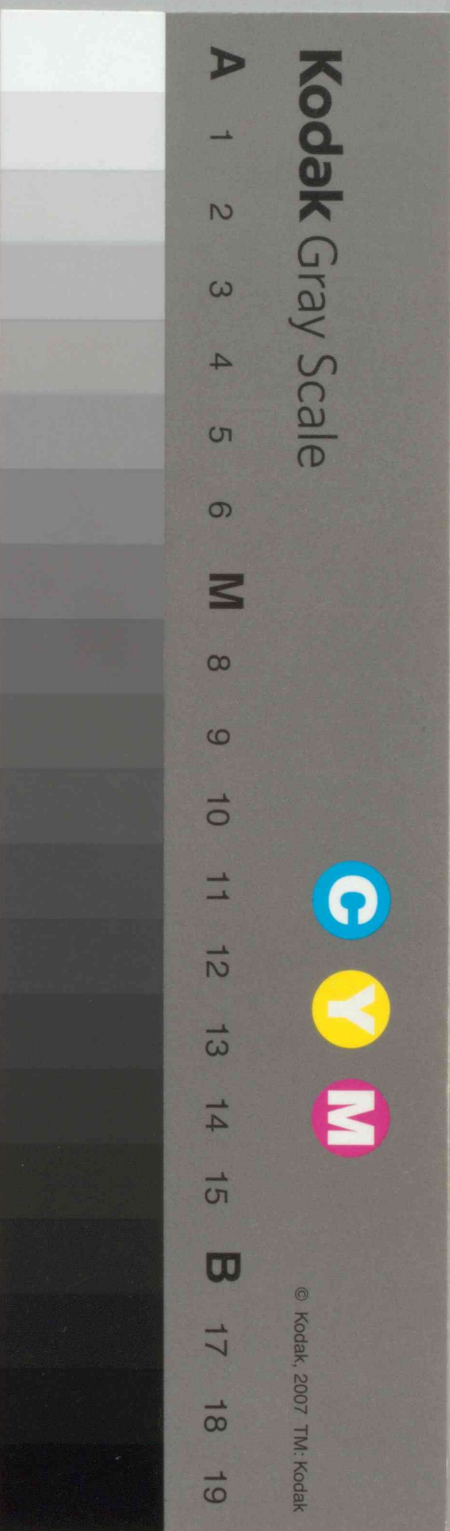
375.9
Y019
資料室



第一冊
卷四

東京
光風館藏版

教
5
20



42623
教科書文庫
4
810
51-1931
200080
1926

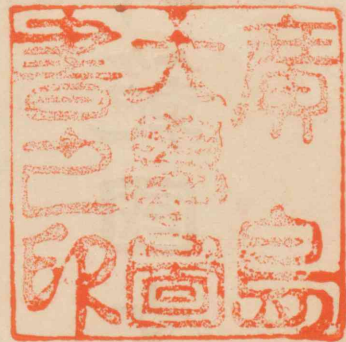




石薬師
 次之内
 本協在

廣重
 筆

石 藥 師 廣 重 筆



師範國文 第一部用 卷四

目次

一	明治天皇の御製……………佐々木信綱	一頁
二	水戸のみゆき……………(昭憲皇太后御作)……………	三
三	大川の水……………芥川龍之介	三
四	郷土……………相馬御風	三
五	雁……………千家元麿	四
六	十三夜……………(曾我物語)	四
七	夜討曾我……………(謠曲)	五

目次

八	栗焼	〔狂言〕	三
九	浅草紙	吉村冬彦	七
一〇	たき火	國木田獨歩	七
一一	煤掃ひ	兼好法師	九〇
一二	四時のあはれ	兼好法師	九三
一三	夕ぐれの時	堀口大學	九六
一四	賀茂真淵	伴蒿蹊	一〇〇
一五	縣居大人の御諭し言	本居宣長	一〇六
一六	天つ星	隱士松翁	一〇八
一七	ひろなりの御子	〔源平盛衰記〕	一一二
一八	鴨越	〔源平盛衰記〕	一一五

一九	扇の的	〔平家物語〕	一二三
二〇	雪前雪後	幸田露伴	一二九
二一	友に寄す	高山樗牛	一三四
二二	忘れ難き日	姉崎嘲風	一四二
二三	西郷と大久保	山本有三	一四五
二四	愛兒の死	西田幾多郎	一五九

目次終



師範國文 第一部用 卷四

佐々木信綱

國學者

歌人

文學博士

明治五年三重縣

石藥師村生

一 明治天皇の御製

佐々木信綱

明治天皇の盛徳大業は、たゞへまつらんも畏し。内外多事に國歩艱難を極めし間に帝位に即かせ給ひてより、新日本の建設を成就せさせ給ひしに至るまで、大御代の榮と輝とは、海の外にも照り、萬世の末にも語りつぎ言ひつぐべし。殊にわが國の國風なる歌の道に御志深くましまし、政務御多端の際にもなほこの道をいそしみまして、國民の爲に永く精神上の規範を示させ給ひしは、感激に堪へざる所なりとす。

天皇の御作歌に於ける、帝王の詩人として古今東西を通じての第一人者にましましき。嘗にその數に於て比なくいますのみにあらず、卓絶なる御歌の力は、よく天地に輝くばかりの御製を



明治天皇 (作謹像御男長邊渡)

留めさせ給へり。

天皇の御製は、まごころを重んぜられ、真情の流露をもてその理想とせさせ給ふにありとおぼしく、そは御製のすべてを通じたる根本の御特色として一貫し給へるを拜すべし。されば御製中の多きを占むる敘景の御作に於ても、おのづから自然眞率のうちに感情のゆたかなるをおぼゆる御傾向著しく拜せらる。

御製の中、吾等の最も感激し奉るは、天皇が畏き大御心よりして、或は國家をおぼし、或は祖神を敬ひ給ひ、或は國民をいつくしみ給ひ、或は御修養御訓誡の意を詠じ給へりし御製なり。由來この種の歌は、ともすれば理路に落ちやすく、歌としての趣乏しき

明治天皇宸翰

花ぐはし櫻もあれど此やどの世はとひけり
花ぐはし櫻もあれど此やどの世はとひけり

もの多かるが習なるを、御製に至りては、高き調、雅びやかなる趣を失はせ給はずして、而もその示し給へる大御心は高く深くして、世を警め人を教へたまへり。けだしこの種の御製は天皇の崇高なる御人格の自然の發露にして、吾等國民の心に大いなる

教訓として不朽の價値を有すること、かの古經典ふるきんてんの一言一句に比し奉るべきものといふべきなり。

明治の聖運は、日に月に隆昌を極めたりきといへども、常に平坦にして然りしにはあらず。日清、日露の戰役等に、波瀾を凌ぎ難を経て、然る後に榮光は輝き國歩は進められしなり。而して天皇の御製を拜するに、戰時の御製に國民の上をおぼし、田園の御製に下民の實情に通ぜさせ給へる御作少からず。こは國と民との上を暫しも離れさせ給はざりし畏き大御心の窺はれて貴きかぎりなるが、これにつけて亡き高崎男爵のかつて語られしところに、陛下の御製は、大演習行幸の度ごとに御上達あらせられ、また大戦役に際して殊にすぐれたる作品をむすぶのせさせ給へるやう拜せらる。とありしことなり。こは天皇の御製があた

高崎男爵
歌人
名は正風
樞密顧問官
御歌所長
舊鹿兒島藩士
明治四十五年薨
年七十七

御製

かも國運の進展と歩趨みりを一にし給ひしが如くにして、頗る感銘に堪へざること、おぼゆるがまゝに記し添へつ。

若しそれ御製全體を通じて、我等が感じ奉るところは、雄々しく高く豊かに、かつ廣やかなる御調なり。讀むものをして、その明らかく朗かなる御調にひたり、おのづから御徳化にうるほひ奉るに至らしむ。これまさしく高貴雄大なる御人格の發露にして、天皇が歌人として有せさせ給ふ獨歩の御特質とたゞへまつるべく、讚歎景仰し奉りて止む能はざるところなり。

今御製の題材につきて拜するに、最も多きは、省察、訓誡、修養等に關するものにして、國民の常に仰ぎて萬世の鑑とすべきは、殊にこの種の大御歌なるべし。天神地祇を尊崇し、信仰を陳べ、神社を詠ませ給へるもの多きは、大日本帝國の神國なるに基づかせ

給へるもの、國民をして敬神信仰の特に尙ぶべきことを知らしめ給へるは、この種の大御歌なり。天壤無窮の國體を詠じ、皇統一系にして神代より承け繼がせ給へる國家なることを歌はせ給へる、また少からず。人をしていよく、光輝あるわが國體を仰がしむべきは、この種の大御歌なり。國民の上を御心にかへさせ給へるもの、亦極めて多し。民の家居を思はせ給ひ、老幼を憐ませ給へる、國民として誰か感激せざるものあらんや。教育に關する御製の少からざるは、國の大本として特に重んぜさせ給へる大御心を拜すべく、軍事に關する御作の多きは、進取尙武の國運に臨み給へる大御代を仰ぐべし。しかも天皇が世界の平和を希ひ給ひ、また喜ばせ給へるは、さる大御心を示し給へる御製の數あるにも拜すべし。その他、あるは幼くて住ませ給へ

歌の枕詞

りし京都の春秋を詠ませたまひ、あるは敷島の道和歌の道を歌はせ給ひ、又愛撫せさせたまへる馬に關するもの、皇恩の魚蟲カに及べるものに至るまで、ひろく御製に取りいれさせ給へり。御製は概ね題詠にして、そは題を奉りしもの、また御親ら選ばせ給へるものありとは洩承るところなるが、そのおほくは世のつねの題詠のたぐひならで、御自らの實感實情を題に寄せさせ給ひしもの、實景實況を題によりて寫させ給へるものなり。これ、事につけ折にふれつゝ、思ふことをありのまゝにつらぬるが歌ぞといふ御信念より起りしものと拜せらる。随つて、題目として古來多く詠みいでざりしもの、全く詠まざりしもの、新事物のたぐひをも詠じ給へり。用語にも古語・新語・口語のたぐひをも取りいれ用ひさせ給へり。

年々におもひやれども山水を汲みてあそばむ夏なかりけり

萬機の御政を一日も忽せにせさせ給はず、夏の暑き盛をも山川に暑さを避け給はざりし御實況を歌はせ給へる、いとも畏き御製なり。天皇御在世中、市内に於ける行幸を除きて、地方行幸の數は明治元年三月御親征並に海軍御點檢の爲大阪に行幸あらせられてより、四十五年五月陸軍野戰砲兵射擊學校に臨御の爲、千葉縣に行幸あらせられしまで、九十八回なるが、そのうち避暑の行幸とも申し奉るべきは、明治六年五月皇居炎上のため赤坂離宮に移りまし、夏、八月三日假皇居御發輦温泉御入浴のため箱根宮の下に行幸、六日より二十七日まで御駐輦、三十一

陸軍野戰砲兵射擊學校
千葉縣印幡郡千代田村にある

日還幸ありし、唯一回に過ぎず。避暑の行幸の如きは、一回だにあらせられず。年々に思ひやり給ひつゝ、御遊の行幸をせさせ給はざりし大御心は、まことに畏ききはみと申し奉るべきなり。

教育

いさ御をある人ををしへのおやにしておほしたてなむ大和撫子い

四十年の御製、「おほしたてなむは生おほし立て教育するやうにせまほしの意。大和撫子は兒童を宣へり。因に云ふ、此の年一月乃木大將學習院長に任ぜられたり。功ある人を教の親とせさせ給ひし一例とも申し奉るべくや。

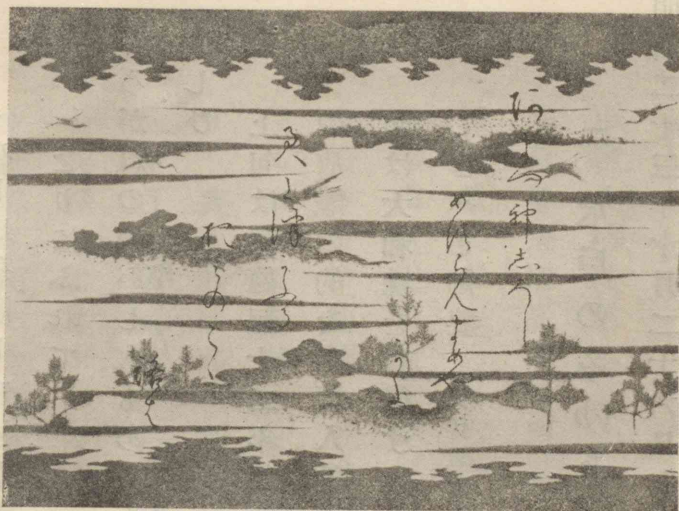
正述心緒いさ

そは連中政の傍る

御筆蹟

あまつ神しろし
めすらんまめや
かに君につかふ
るおみのこゝろ
は

東宮 大正天皇
大后宮 英照皇太后
藤原夙子
幸子 萬里小路幸子



みづからも從ひ奉るべく、豫て仰言ありしかばいと嬉しく
て出立つ。この大御代なら
ずばいかで女の身にてか
ることを見んと思ふに、おの
づから心も勇みたちて打笑
まれぬ。御車、上野の停車場
に駐る。やがて樓の上にぞ
のぼらせたまふ。東宮にも
御送りにとくより参り給へ
り。大后宮よりも典侍幸子
御使に参りて厚き仰言ども
奏す。みづからも畏き御言

昭 憲 皇 太 后 御 筆

奏す。みづからも畏き御言

大臣 内閣總理大臣山
縣有朋等

侍從長 德大寺實則

葉承る。かくて大臣を始め送り奉る人々多かるを漏し給はず
御前近く召して御言葉あり。

程なく侍從長参りて何事も整ひたりと奏す。やがて劍匣を先
だて、汽車に召させたまふ。みづからも聯れる車に乗る。笛
の音聞ゆるまもなく煙をあとにして御車は疾く進みぬ。道の
ほど大方は田畑にて、さのみかはれることもなし。されど何處
も稻のみのりよきを見るは民のため嬉しきことぞかし。埼玉
の縣はさいづごろの洪水に利根川の水溢れきとて、民のいたづ
きておほしたてし畑つものなども皆荒れはてたり。河の如き
處もありて、行幸をろがむ人々も、あるは水に入り、あるは舟をう
かべなどす。いかにして一日々々を送りつらんと思ふに、胸痛
うなりもてゆく。そこを過ぎぬれば、稻葉の浪田のものに充ち溢

六戸
茨城縣西茨城郡
六戸町
水戸市の西十七
軒に六戸驛があ
る
有栖川宮
熾仁親王
北白川宮
能久親王
岩間村
茨城縣西茨城郡
岩間村
六戸町の南四軒
今は常磐線の一
驛

れたるけしきに、心もかはりぬ。處々の様珍しなど言ひつゞく
る間に、早う水戸に着かせ給ふ。停車場より御馬車にて行在所
に入らせ給ふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定め給へ
るなりとぞ。とばかりありて例の御對面の事あり。果てさせ
給ひし後も聊か疲れさせ給ふ御氣色なくて、明日の演習の方略
書などとうてさせて御覽ず。かく御心に懸けさせ給ふを見奉
るも畏し。この夜も常の如く十一時に大殿籠りぬ。
二十七日、今日も天氣好し。八時より出立たせ給ふ。汽車にて
六戸といふ處までわたらせたまひ、それより金華山と名づけた
る御馬に召させ給ふ。有栖川宮北白川宮を始め大臣その外數
多の人々近衛の將校なども馬にて従ひ奉りぬ。みづからは馬
車にて往く。岩間村に到らせ給ふころ、遠近に煙立騰り、銃の音

成井村
同縣新治郡岡部
村大字成井
岩間の南東
筑波山の東の方
十二軒



有栖川宮熾仁親王

こゝかしこに聞えて、赤白の旗風に打靡き、馬の嘶く聲も處々に
聞えたり。戰酣ならんと思ふ頃は、銃の音も絶間なきに、御心勇
ませ給ひて、折々はことかたに御馬進めさせつゝ、ねもころに御
覽じ給ふ。をりしも、秋の末つ
かたなれど、日影は猶暑く覺ゆ
るに、更に厭はせ給ふ御氣色も
なきを、この演習に出でたる兵
どもは更なり、文武の官人なべ
て畏み奉るなるべし。程なく
終りぬと奏するより、御野立にてしばし憩はせ給ひ、さて汽車に
召して行在所へ還らせ給ふ。
二十八日も昨日の時刻より出で給ひて、こたびは成井村にて御

覽あり。筑波山近く見えて景色いとよし。大方は昨日の如し。されど今日は敵の近づきたりと見えて、大砲小銃の音烈しく廣き原にも響き渡りぬ。上には例の御馬にて、道も定めさせ給はず、森の中松の林など分入りて



北白川宮能久親王

ばとておりたつ。黒煙立騰る中に、火氣見えて烈しき音の聞えたる、いと勇まし。事あらん日は親妻子をも顧みず、君のため命を捨て、戦ひなんと思ふに、いと頼しくはあれど、又いたはしく

戦ひなん
頼しくはあれど、又いたはしく

小松宮
彰仁親王

御風の心地
二十九日還幸三十日教育に關する勅語を東京なる高等師範學校に於て御下賜相成る筈の處なほ御風氣のため常御殿に文部大臣芳川顯正を召して下賜せられたのであつた



小松宮彰仁親王

て胸もふたがる心地ぞする。今日の演習も果てぬれば、御野立にて晝のおもの聞召す。それより御馬上にて觀兵式分列式御覽ず。みづからは例の馬車にて見る。終りて審判あり。小松宮始め將校打集ひて御前に進む。兩日の勞を犒ひ給ふ御言葉あり。かたじけなみ奉りて敬禮するさま見るもめでたし。小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわり給ひぬ。しばし御休ありて汽車にて行在所に歸らせ給ふ。御道より思し立たせて縣廳へ臨幸ならせ給ふ。今日はあやにくに御風の心地にて例ならず見えさせ給ふをもて隠してかく勉めさ

二 水戸のみゆき

五

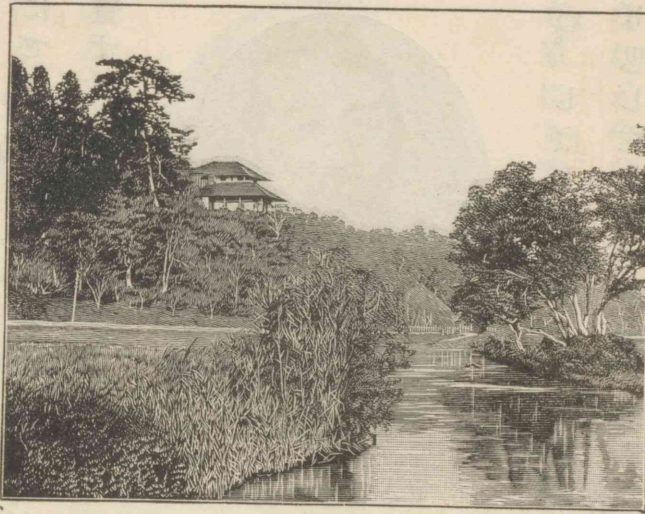
せ給ふいと畏し。

常磐公園

水戸市の西郊常磐村にある
徳川齊昭の開いたところ
借樂園といつた好文亭
徳川齊昭が借樂園の西隅に建てた亭

徳川昭武

水戸徳川家の當主
徳川齊昭の子
隠居の後別に子爵を授けられた



常 磐 公 園

て、暫し立寄りて見る。高き處なれば、家の内より仙波湖見渡さ

みづからは仰言によりて、常磐公園なる好文亭といふ處に往く。到り着けば徳川昭武その外人々出迎へたり。梅數多植ゑたる林あり。こは事ある時の爲に實を貯へんとてなりとぞ。様々の木立ありて庭の作りざまいと面白し。老松の蔭に石の碁盤將碁盤据置きたる、珍かに

齊昭

水戸藩主
萬延元年(三三〇)薨
年六十一
私に烈公と諡す

弘道館

天保十二年齊昭が建てた藩學

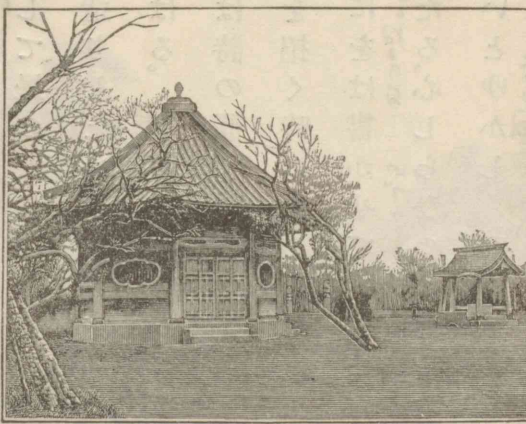
る。十五夜の月のさしのぼる景色いとよし。色づく小田も見
おろされたり。こは中納言齊昭の世を遁れて後心安く住まひ
して民のなりはひを見んために
造りしといふ。さもあるべく思
はる。家の内廣らかにて、杉戸に
は詩の韻字残らず書かせて、詩人
を招く時のためとし、又五十音で
にをは書かせて歌人のためとし
たる心しらひの厚さをおもふに、
いとゆかし。又板敷あり。こ
は心ある人々に折々酒など與へ
し處なりとぞ。立歸る道の程、弘道館の碑を見る。八角の堂の



弘 道 館

八卦
 坤 艮 震 離 巽 坎 乾 兌

内に寒水石の大きやかなる立てり。世に知られたる記を自筆のまゝ彫り入れたるなりけり。一句々々読みもてゆくに、その



弘道館記碑

人の御國を思ふ志慕はれて涙ぐまれぬ。扉にはこまやかなるほり物あり。鴨居とおぼしき處には易の八卦を彫りつけたり。昔は此處に學舎數多ありきといふげに珍しき處を見しかな。是も上の仰言なくば、といと嬉しくて、時の過ぐるも覺えず。人々、夜更け待りぬべし。といふに驚かされて、急ぎ還る。月夜なれど、篝火焚き提灯など數多照らして晝の如し。御前に參る。上には六

大川
 隅田川
 芥川龍之介
 文學者
 東京生
 昭和二年歿
 年三十六

大川端
 隅田川の川ばた
 椎
 横網町二丁目
 松浦侯の邸あり
 椎の大木あるゆ
 ゑ椎の木屋敷と
 呼びならはした
 横網
 東京市本所區横
 網町
 百本杭
 横網町の河岸
 中學
 東京府立第三中
 學校

時ばかりに歸りましきと聞きて、後れ侍りぬなど奏するに、打笑はせ給ふ。好文亭の事などつばらかにと思へど、とみに言ひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。記さまほしき事ども多かれど、筆も進まず、ことに明日東京へ還りまさんとて御調度ども取納むるに物騒がしければ、書きさして止みぬ。

(昭憲皇太后御集)

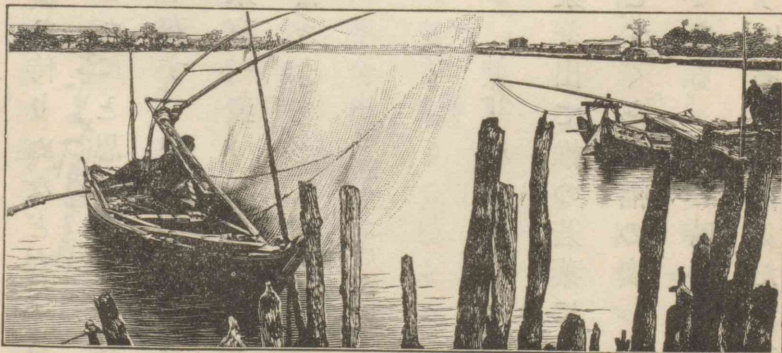
三 大川の水

芥川龍之介

自分は大川端に近い町に生まれた。家を出て椎の若葉に掩はれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの幅の廣い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうにあの川を見た。水と

舟と橋と砂洲と、水の上に生まれ水の上
に暮してゐるあわたしい人々の生活とを見た。
眞夏の日の晝すぎ燻けた砂を踏みながら、
水泳を習ひに行く通りすがりに、
嗅ぐともなく嗅いだ河の水の匂も、
今では年と共に親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分はどうして、かうもあの川を愛する
のか。あのどちらかといへば泥濁りの
した大川の生暖い水に、限りない床しさを
感ずるのか。自分ながらも、少しく其の
説明に苦しまずにはゐら



隅田川百本杭

山の手の郊外
東京府北豊島郡
瀧野川町田端

れない。唯自分は、昔からあの水を見る毎に、何となく涙を落し
たいやうな、言難い慰安と寂寥とを感じた。全く自分の住んで
ゐる世界から遠ざかつて、懐かしい思慕と追憶との國に入るや
うな心持がした。此の心持の爲に、此の慰安と寂寥とを味はひ
得るが爲に、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄と青い油のやうな川の水と太息と息のやうな覺束ない
汽笛の音と石炭船の鳶色の三角帆と、——すべて止み難い哀愁
を喚起す是等の川の眺は、如何に自分の幼い心を其の岸に立つ
楊柳の葉の如くをのゝかせたことであらう。

此の三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林の蔭になつてゐる書
齋で平靜な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶月に二三度は
あの大川の水を眺めに行くことを忘れなかつた。動くともな

アカシヤ
 豆科の常緑喬木
 花は五月頃
 淡黄色の多くの雄蕊と一箇の雌蕊とをもつた圓筒狀の長い房をなし葉腋から垂れて咲く

く動き、流るゝともなく流れる大川の水の色は、静寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、丁度、長旅に出た巡禮が漸くまた故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由な、懐かしさに融かしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出来るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシヤが、初夏のやはらかな風に吹かれて、ほろ／＼と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、露の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒さうに啼く千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新にする。丁度、夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうなをのゝき易い少年の心は、其の度に新な驚

バルコン
 balcon 露臺

ゴンドラ
 gondola 細長くて底は淺く軸と櫓とが曲つて高く水上にあらはれてゐる小舟

ヴェニス
 Venice 伊太利東岸の海市

ダヌンチオ
 Gabriel d'Anunzio (1863--)

伊太利の詩人



異の眸を見はらずには居られないのである。

しく思ひ出さずには居られないのである。

大川の流を見るときに、自分はあの僧院の鐘の音と鶴の聲とに暮れて行くイタリヤの水の都——バルコンに咲く薔薇も百合も、水底に沈んだやうな月の光に青ざめて、黒い柩に似たゴンドラが其の中を橋から橋へ夢のやうに漕いで行くヴェニスの風物に、溢るばかりの熱情を注いだダヌンチオの心持を、今更のやうに慕は

く平に流れる潮のほひとに對して、何といふこともなく言ひやうのない寂しさを感じ、自分の心が霧の底を流れる大川の水のやうな旋律をうたつてゐるやうな氣がせずにはゐられないのである。(芥川龍之介全集)

四郷土

相馬御風

相馬御風
文學者
名は昌治
明治十六年新潟
縣糸魚川町生

郷土といふものゝ人間の心を惹きつける作用は今更ながら不思議なものである。一方に、
「月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。」船の上
に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にし
て旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづ
れの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思止まず。」

といひ、或は、
「行脚僧 羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」

芭蕉肖像真蹟



松尾芭蕉

などといつてゐた彼の芭蕉でさへ、他方に於ては、

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし、我今は初めの老も四年過ぎて、何事につけても昔の懐か

しきまゝに、同胞のあまた齡傾きはべるも見捨てがたくて、初冬の空の打しぐるゝ頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽

神前
この松のみはへ
せし代や神の秋
桃青

筆蹟
初めの老
四十歳
伊賀
伊陽

西行

歌僧
俗名佐藤義清
建久元年(八五〇)
寂
年七十三

の切なるものであつたかを察することが出来る。
二十三歳で妻子を振棄て、佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西
行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと思はんだにもあはれな
るべし

世の中を捨て、捨て得ぬ心地して都離れぬ我が身なり
けり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういふ風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られた此等
脱俗の人々さへも、不思議に彼等の生まれ且育てられた郷土に
對しては、しかく切なる愛慕の情を持つて居た。そもく、此の
郷土の人間に對して持つてゐる魅力はどこから來るのであら

うか。

そもく、郷土が私たちの心を惹きつける點は、どういふところ
であるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に
於て優れてゐるためかといふと、必ずしもさうではない。人情
が特に他の何れの土地のそれよりも醇美であるためかといふ
に、それも然りとは言へない場合が少くない。それでは何か特
別に自分の生活に都合のいゝ、外的條件があるためかといふに、
それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかといつて私
たちは、理智的に考へて故郷といふものは大切なものだと思
ひ、判断してから後に、故郷を慕つてゐるとはなほさら考へられ
ない。
然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を惹かれるの

か。それは全く「何とはなしに」である。理智的判断によるのでなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふでもなく、それはたゞ「何とはなしに」である。郷土の人心を惹きつける魅力は、實に此の何とも言ひあらはされない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不思議な、音樂的な、詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。此の不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らく如何なる理智の人と雖も否定することは出來ないであらう。けれども、今の時代には追々此の自分の郷土と云ふものを失ひつゝある人が多くなりつゝあることも、亦明かな事實である。私は常に、漁夫に取つて、海は單に彼等に生計の資を與へる爲の

Emerson
(1803-1882)
思想家
詩人
アメリカの
エマーソン

みの場所ではなくして、又實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であると思つてゐる。全く漁師ほど海を愛することの切なる者はない。それは海は彼等に取つては離れがたい心の世界である。農夫に取つて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失ふことである。漁師に取つて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。よく引合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマーソンの自然論の中の左の一節は忘れがたい。

「樵夫の伐る一箇の材木と詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は疑もなく二十三年ほどの農圃から成立つてゐる。誰は此の畑を所有し、彼は彼の畑を所有し、また某は向ふの森林地を所有してゐる。しかし彼等の中誰一人も此の風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分に全きものに統べて観ることの出来る眼をもつた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。即ちかくの如き人は詩



人である。此の財産こそ此等三人の農圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證書は此の財産に對しては何等の権利を與へぬのである。此のエマーソンの所謂二つの心を合はせ持つた人々が最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに何の差支があらう。海を漁りの場所とすると同時に、其處を心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。郷土に定住してさういふ幸福を見出し得る人は、眞に郷土を有する人だともいへる。私たちはさういふ人々の生活が最も懐かしく思はれる。

彼等
日本人

君の國

アメリカ

ヒロシゲ

歌川廣重

江戸後期の浮世

繪師

安政五年(五二)

歿

年六十二

長い間アメリカへ往つてゐた一人の藝術家が、久しぶりに故國の自然や人間の生活を、彼の新鮮な眼で眺め直した印象記を書いた中に、日本の農民の生活について書いた次の如き一節があつた。

「彼等はどんな仕事の中にも、きつと楽しみを見つけ出す。さうして其處へ彼等の藝術を加味する。日本の百姓がその農圃を藝術的に耕すことは本當に君の國の園丁が花園を作る程に繊細な美的注意を拂つてゐる。あのヒロシゲの繪で有名になつた東海道を汽車に乗つて旅をして見ると、兩側の田圃は、みんなかはいらしい庭園だ。そこには此の國の百姓が仕事を楽しんだ蹟が、鮮やかに残つてゐる。君の國の勞働者が仕事を苦しみだと思つて、早く晝間の八時間が過ぎて、自由

の夕暮の來るのを待つてゐるあの心持に比べると、日本人は、

まことに幸福な生活をしてゐると謂はなければならな

い。

日本の百姓だとして、皆が皆、さうだとも謂へまいけれども、併しなほ多くのさうした詩人の心を持つた人々のある事は、否む事の出來ない事實である。私たちは此の貴い事實を祝福せずには居られない。

西洋のある哲學者の書いたものゝ中にも、こんな一節があつた。



(筆重廣) 塚平道海東

「ロシヤと戦争中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして一種の精神的更新を感得したといふことである。一體ヨーロッパの遠足家といふものは、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物である草花を汚したり、さまざまの樹木や記念物を傷つけ、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を楽しませてゐる輩である。」

私たちは一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうか、事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切なる心を持つた民族である事實は信じて疑はない。自然は何といつても、私たちの心の故郷である。

脚氣患者が郷里に歸ることによつて何時となしに健康を恢復することが出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取戻すことが出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子供たちにも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃ゆりかごであつて、また墳墓であるべきである。(對山雜記)

五 雁

千家元麿

秋アキの
暖かい静かな夕方の空を、
百羽ばかりの雁が

雁の
群
一羽
目とま
印象

千家元麿
詩人
明治二十一年東
京市生

暖かい一團の心よ。
天も地も動かない静かさの中を汝ばかりが動いてゆく。
黙つて、すてきな速さで、
見て居る内に通り返り過ぎてしまふ。
(千家元麿詩集)

六十三夜

頃は人皇³⁷第八十一代安徳天皇の養和元年^(八四)あらたまの年立³⁸歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣くくのたまひけるは、

養和元年
(八四)
一萬
曾我十郎祐成
箱王
曾我五郎時致

曾我殿
太郎祐信
伊東祐親の姉の
子
狩場
伊豆國賀茂郡
赤澤
工藤一藤
祐經
鎌倉殿
源頼朝
此の里
相模國足柄上郡
曾我村

「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん狩場より歸りたまふ道にて、工藤一藤とやらんに射られて死にたまひぬ」と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らずや過ぐらんなど大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出て遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三

河津殿
三郎祐泰
伊東祐親の子



（會圖語物我曾筆重廣）る見を雁飛弟兄我曾

つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬鞍・弓矢を以て物を射ありく事の羨ましきよ。これらの事ども思

遠侍

ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるるぞや」とて、袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣きあたり。一萬の乳母の女房これを聞き、て「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくく入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合はせて互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓薄刃の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あ

次第
 誦ひ方の名稱
 して
 能で主なる役を
 勤める者
 この能では曾我
 五郎時致
 つれ
 してに連れる者

なたこなたに射通して、一萬箱玉に申しけるは、我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。（死し候はらむし）和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ、といひければ、弟も打領きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。（曾我物語）

七 夜討曾我

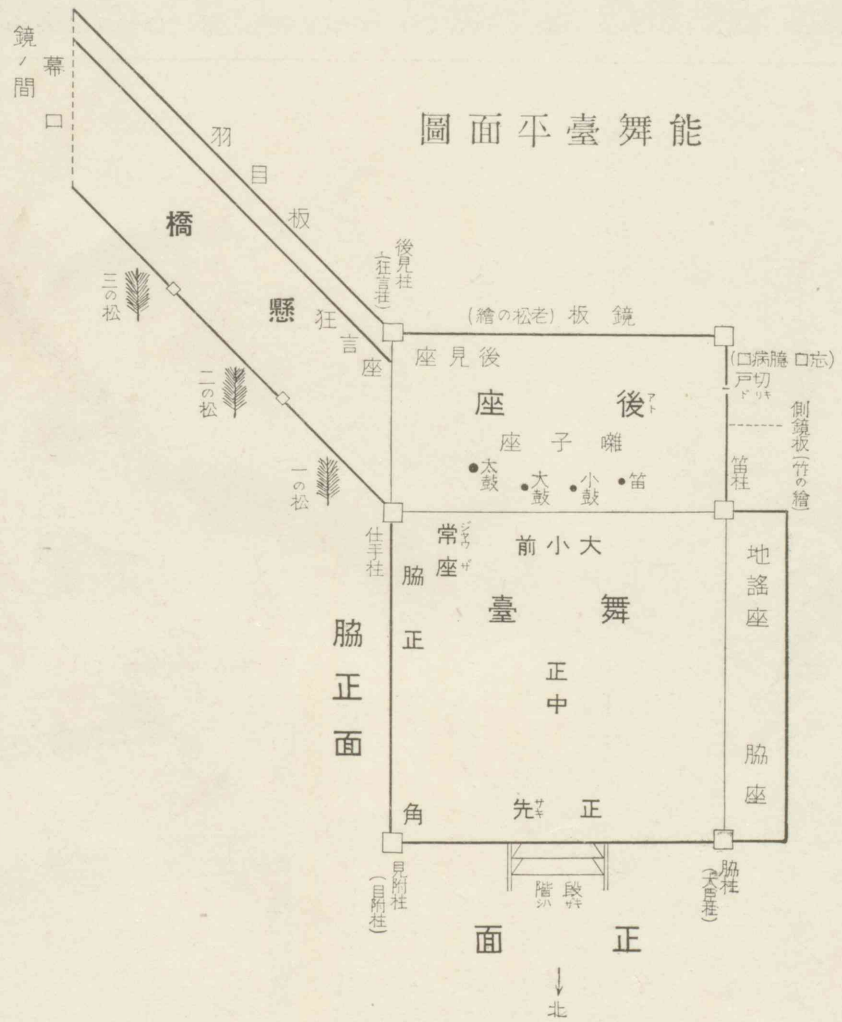
次第にて曾我十郎五郎、從者團三郎鬼王を從へて出で舞臺の兩側に並ぶ。

其の名も高き富士の嶺の、其の名も高き富士の嶺の、御狩にいざや出でうよ。



夜討曾我 耕漁筆

能舞臺平面圖



十郎正面を向きて名乗る。

この能では曾我十郎祐成及び従者の鬼王と團三郎
我が君
源頼朝
さし
誦ひ方の名稱
上げ歌
誦ひ方の名稱

此の能は曾我十郎祐成及び従者の鬼王と團三郎
我が君
源頼朝
さし
誦ひ方の名稱
上げ歌
誦ひ方の名稱

十郎詞 これは曾我の十郎祐成にて候。さても我が君東八箇國の諸侍を集め、富士の巻狩をさせられ候間、我等兄弟も人なみに罷り出で、唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人さしつけふ出でていつ歸るべき故郷と思へば猶もいとしく、名残を残す我が宿の名残を残す我が宿の垣根の雪は卯の花の咲散る花の名残ぞと、我が足柄や遠かりし富士の裾野に着きにけり、富士の裾野に着きにけり。おあつち足柄さへはくんと遠く思えおれ富士裾野の山に候。

十郎詞 急ぎ候程に、これははや富士の裾野にて候。いかに時致、然るべき處に幕を御打たせ候へ。して詞畏まつて候。

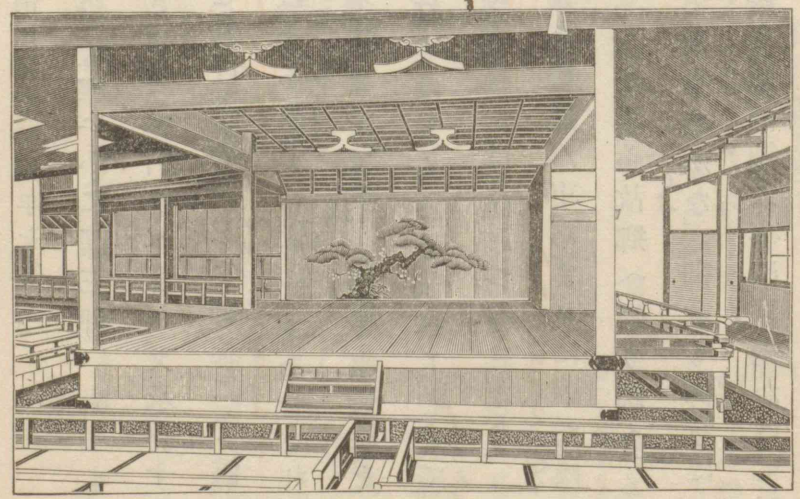
これにて幕を打ちたる陣屋に入りたる心地。十郎は脇座に就く。

五郎が舞臺の真中に出づるを見て、

十郎詞 いかの時致、今に始めぬ御事なれども、我が君の御威光のめ
 てたさは候。打並べたる幕の内、目を驚かしたる有様にて候。
 かほどに多き人のなかに、我等兄弟が幕の内程物さびたるは候
 まじ。して詞さん候。今に始めぬ君の御威光にて候。さてかのあ
 らましは候。十郎詞 あらましとは何事にて候ぞ。して詞 あら御情
 なや。我等は片時も忘るゝ事はなく候。彼の祐經が事候よ。
 十郎詞 げに、某も忘るゝ事はなく候。さていつをいつまでな
 がらへ候べき。ともかくも然るべし御定め候へ。して詞 御
 誕の如く、いつをいつとか定め候べき。今夜夜討がけにかの者
 を討たうずるにて候。十郎詞 それが然るべう候。さらばそれに
 御定め候へ。や。思ひいだしたる事の候。我等故郷を出てし
 時、母にかくとも申さず候程に、御歎きあるべき事、これのみ心に

とらく申し候へし。

懸り候間、鬼王か團三郎か、兄弟
 に一人形見の物を持たせ、故郷
 へ還さうずるにて候。して詞 げ
 にこれは尤にて候。さりなが
 ら一人歸れと申し候は、定め
 てとかく申し候べし。只二人
 ともに御還しあれかしと存じ
 候。十郎詞 尤にて候。さらば二
 人共にこなたへ参れと御申し
 候へ。して詞 畏まつて候。いか
 に團三郎、鬼王こなたへ参り候
 へ。團三郎詞 畏まつて候。



能 舞 臺

從者兩人は召されて十郎の前に出でて兩手を突く。

して團三郎兄弟これへ参りて候。十郎「いかに團三郎。鬼王もた
しかに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか、又承引すま
じきか、眞直に申し候へ。」團三郎「これは今めかしき御説にて候。

何事にて候へ、御意を背く事はあるまじく候。十郎「あらうれし
や。さては承引すべきか。」團三郎「畏まつて候。何事も御説をば

背き申すまじく候。」十郎「此の上はくはしく語り候べし。」さても

我等が親の敵の事、彼祐經を今夜夜討がけに討つべきなり。兄
弟空しくなるならば、故郷の母歎き給はん事、あまりにいたはし
く候程に、形見の品々を持ちて、二人ながら故郷へ歸り候へ。」團

三郎「これは思ひもよらぬ御説にて候ものかな。御意も御意にこ
そより候へ、此の年月奉公申し候も、此の御大事に眞先かけて討

死仕るべき爲にてこそ候へ。何と御説候とも、此の儀に於ては

罷り歸るまじく候。鬼王「さやうにてはなきか。」鬼王「なかくの

事。尤にて候。十郎「何と歸るまじいと申すか。」團三郎「ふつつとま

かり歸るまじく候。」十郎「これは不思議なる事を申すものかな。

さてこそ以前に、詞をかためて候に、さてはふつつと歸るまじき

か。」團三郎「さん候。十郎「汝は不思議なる者にて候。のう五郎殿、あ

れを御還し候へ。」して「畏まつて候。やあ、何とて罷り歸るまじい

とは申すぞ。さやうに申さうずると思し召してこそ、始めより

詞をかためて仰せられ候に、何とて歸るまじいと申すぞ。しか

と歸るまじきか。」
と小さ刀の柄に手をかけ、否と言はゞ手打にせんずる勢。

鬼主「まづ畏まつたると御申し候へ。」

と鬼王にいはれて

團三郎「畏まつて候。してしかと歸らうずるか。」團三郎「罷り歸らうずるにて候。しておくそれにてこそ候へ。罷り歸らうずると申し候。」
 十郎「何と歸らうずると申すか。」團三郎「さん候。いかに鬼王に申し候。」
 鬼王「何事にて候ぞ。」團三郎「さて何と仕り候べき。罷り歸れば本意に非ず、歸らねば御意に背く。とかく進退こゝに窮つて候。」
 鬼王「仰の如く罷り歸れば本意に非ず、又歸らねば御意に背く。我等も是非を辨へず候。但しきつと案じいだしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら團三郎殿とこれにて刺違へ候べし。」
 團三郎「げにく、いづくにても命を捨つるこそ肝要なれ。いざさらば刺違へう。」
 鬼王「尤にて候。」

といく

わい

同吟
 地誦の人々の一
 齊に誦ふこと
 地誦といふは舞
 臺の向つて右側
 に六人又は八人
 並びゐて誦ふ人
 人の稱
 地ともいふ
 誦ひ方の名稱

あはや兩人素袍の肩をはづして刀の柄に手を掛けて互に貫き合はんとす。五郎かくと見て走り寄りてこれを制止す。

して詞あゝ暫く。是は何としたる事を仕り候ぞ。十郎「詞やあ兄弟の者返すまじきぞ、返すまじきぞ。まづ、心を静めて聞き候へ。今夜この處にて祐經を討ち、われら兄弟空しくならば、さて故郷にまします母には誰かかくと申すべきぞ。敬ふ者に従ふは君臣の禮と申すなり。これを聞かずば生々世々、永き世までの勘當と、上げ歌同吟、かきくどきのたまへば、かきくどきのたまへば、鬼王團三郎さらば形見を賜はらんと、云ふ聲の下よりも、不覺の涙せきあへず。

十郎兄弟に懇に諭されて自殺を思止り面を伏す。
 十郎「それ人の形見を贈りしたためしには、彼の唐土の樊噲が、母の

くせ
諸ひ方の名稱

衣を着替へしは、永き世までのためしかや。十郎さし「今當代の弓取
 の形見の衣を着替へしは、永き世までのためしかや。今當代の弓取
 の、母衣とはこれを名づけたり。同吟、然ればわれらが卑しき身を、
 父、母の衣とまじりて、母の衣とまじりて、母の衣とまじりて、
 警ふべきにはあらねども、恩愛の契のあはれさは、われらをへだ
 てぬ習ひなり。」
 十郎懷中より文を取り出し、

くせ「さる程に兄弟、文こま」と書きをさめ、これは祐成が、今はの
 時にかく文の文字消えて薄くとも、形見に御覽候へ。皆人の形
 見には、手跡に勝るものあらじ。水菫の跡をば心にかけてとひ
 給へ。老少不定と聞く時は若き命も頼まれず老いたるも残る
 世の習ひ、飛花落葉の理と思召されよ。

と母への口上を團三郎に傳ふれば、團三郎進みて文を請取る。五
 郎も守袋を出して押しいたとき、

その時時致も、肌の手を取りいだし、これは時致が形見に御覽候
 へ。形見は人のなき跡の思の種と申せども、せめて慰む習なれ
 ば、時致は母上に添ひ申したると思召せ。今までは其の主を守
 り佛の觀世音、此の世の縁なくと來世をば助け給へや。

鬼王五郎より守袋を請取る。

十郎既に此の日も入相の、同鐘もはや聲々に、諸行無常と告渡る。
 さらばよ急げ、急げ使。涙を文に巻きこめて其のまゝやる文の
 干ぬまにと、詠ぜし人の心まで、今更思ひしら雲のかゝるや富士
 の裾野より、曾我に歸れば兄弟すぐくと跡を見送りて泣きて
 留る哀れさよ、泣きて留る哀れさよ。

二人は別を告げ、形見の品を左の手に捧げつゝしづくと立ちて樂
 屋に入るを兄弟は見送りてなげく心。中入。

後づれ

後じて
申入後に出来
るつれ・してを

いふ

一聲

誦ひ方の名稱

一の松

橋懸の舞臺に近
い處に植えてあ
る松

この間に大藤内といふもの討入に驚き、あわてふためきて逃げま
どふことあり。後づれ古屋五郎と御所の五郎丸一聲にて出づ。

後づれ一聲同「寄せかけて、打つ白浪の音高く、鬨を作つて騒ぎけり。

五郎は右に抜きたる太刀をもち、左に松明ふりてらしつゝ一の松
まで來り、舞臺なるつれをきつと見て、

後じて「あら夥しの軍兵やな。」詞「われら兄弟討たんとて、多くの勢
は騒ぎあひて、こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿々々々。何
とて御返事は無きぞ、十郎殿。」
と兄の行方を探す心。

宵に新田の四郎と戦ひ給ひしが、さてははや討たれ給ひたるよ
な。口惜しや。死なば骸を一處とこそ思ひしに、誦物思ふ春の
花盛、散りくになつてこゝかしこに、骸をさらさん無念やな。

いかにも無念なる面持にて松明投捨つ。

上げ歌同「味方の勢はこれを見て、味方の勢はこれを見て、打物の鏝
元くつろげ、時致を目がけてかゝりけり。して「あらものくしや、
おのれらよ。」同「あらものくしや、おのれらよ。さきに手並は、
知るらんものをと太刀取直し、立つたる氣色譽めぬ人こそなか
りけれ。かゝりける處に、かゝりける處に、御内方の古屋五郎、樊
噲が怒をなし、張良が祕術をつくしつゝ、五郎が面に斬つて懸る。
時致も古屋五郎が抜いたる太刀の鑄を削り、暫しが程は戦ひし
が、何とか斬りけん古屋五郎は二つになつてぞ見えたりける。

五郎は烏帽子も直垂も脱ぎて鉢卷の姿となる。

かゝりける處に、かゝりける處に、御所の五郎丸御前に入れたて、
かなはじめのものと肌には鎧の袖を解き、草摺輕げに、ざつと投げ

樊噲

漢高祖の家來

勇將

張良

漢高祖の家來

智謀の將

かけ、上には薄衣引きかづき、唐戸のわきにぞ待ちかけたる。して
 「今は時致も運つき弓の、回今は時致も運つき弓の力も落ちて、
 眞まことの女ぢよぞと油斷して通るを、やり過しおし並べ、むんずと組くみめば、
 して「おのれは何者ぞ。」五郎丸御所の五郎丸。回あら物々しとわた
 がみ掴んで、えいや〜と組み轉んで、時致上になりける所を、下
 よりえいやと又押返し、其の時大勢おほせをり重なつて、千筋ちぢんの繩なはをか
 けまくも、忝かたじけなくくも、君の御前おんまへに、追つ立て行くこそめ仇敵たけれ、仇敵仇敵あいつは、仇敵仇敵あいつは、仇敵仇敵あいつは、
五郎丸五郎を真中にして繩取二人左右にあり、五郎丸後よりつきて樂屋
 に走り入る。(觀世流謠曲)

八 栗 焼

主人「このあたりに住まひ致す者でござる。」

あつかさる方から見事な

いしやう

栗を貰つてござる。それについて太郎冠者おんを呼出し、談合致す
 事がある。太郎冠者あるかやい。冠者御前に。主、汝を呼びい
 だすは別の事でもない。ちと汝にいふする者がある程に、それ
 に待て。冠者冠者まつてござる。
 主、いや〜太郎冠者。此の画の内な物をさる方から貰うた。
 さいて見よ。冠者冠者先づお重の内おちゅうのうちにでござる程に、お菓子でござりま
 せぬか。主、いや〜それでもない。冠者それならばつるし柿で
 ござりませぬか。主、いや〜それでもない。栗ぢや。冠者栗で
 ござるか。主ななななか〜冠者これは見事な栗でござる。主され
 ば此のやうな見事な栗はない。それにつき不思議な事がある。
 人に物をくれられうならば、或は三十か五十下されう所を四十
 下されたが、合點のゆかぬ事ぢや。冠者それは物でござらう。定

めて等閑ならなさるゝお方から貫はせられたものでござらう。
 主「なか〜」。冠「それならば始終末代までも仰せ合はされうと
 のお事でござりませう。主「これは汝が言ふ通りぢや。さて此
 の栗について何れもを申し入れうと思ふが何とあらうぞ。冠
 「これはようござりませう。主「さりながら客は七八十人もあら
 う、栗は四十ならではないが、何として進じたものであらうぞ。
 冠「これは何とぞ致し様がござりませう。主「汝分別をして見よ。
 冠物といたしませう。先づ皮を去りまして摺鉢へ入れて摺り
 碎きまして、さてよい程に圓うして遣はせられたらば、七八十人
 へもいだされませう。主「これは尤ぢやが、それでは栗の大きい
 詮がない。冠「誠に左様でござる。それならば先づこれを焼栗
 に致いて、私の持つて出まして、上座にござる御方へずらりと進

じませうぞ。又末座にござる御方は皆御若衆で御心安うござ
 る程に、餘のお菓子なりとも進ぜられたがようござる。主「これ
 は汝が言ふ通りぢや。そちに言附くる程に急いで焼栗にして
 こい。冠「畏まつてござる。主「えい。冠「はあ。(扇より太郎冠者の
 扇へあげ、栗を渡す。主人入る。)

冠「さて〜このやうな見事な栗をついに見たことがござら
 ぬ。さてどこもとに持つていて焼かうぞ。お次へ持つてまゐ
 らうか。いや〜お次へ持つていたらば、若子様の出でさせら
 れて、あそこへもくれい、こゝへもくれいと仰せられうぞ。遣は
 せずは御機嫌がわるからう、また數の定まつた物ぢやに依つて
 進ずることは成るまい。たゞお臺所へいつて焼かう。(と言つ
 て小廻り) 誠にいか様の栗も見たが、此のやうな大きな栗を見た

ことがない、また有れば有る物でござる。今これによい火がお
 こつてある。誰も此の火はいらぬか。えい、幸のことぢや。栗
 を焼くと云はんばかりの火ぢや。さらば焼かう。さてもく
 見事な栗でござる。(一つ二つ焼きかけてぼんく)といつて飛退く
 まことに栗を焼くには芽を取つて焼くと云ふ事ははつたと忘
 れて、びつくりとした。(芽を取つて焼く最前から斯様に致せばよ
 いものを、はつたと忘れてよい肝をつぶいた。(五つ六つくべて扇
 にてあふぎ)お、焼くる、焼くる。火がよい所で、はや焼けた。最
 早これはよいは。これもよい。これは悉くよいは。(扇にて取
 出し、兩手灰を吹落し)これは焼けたれば一入見事な栗ぢや。(残り
 ず栗を扇に載せ)まんまと焼いた。急いで持つてまゐつてお目に
 かけよう。

いか様このやうな見事な栗はござるまい。定めて風味もよか
 らう。それに就きて思ひ出したことがある。お座敷へはそれ
 がしが持つて出るであらう。「太郎冠者、これは見事な栗ぢやが、
 風味は何とあるぞ」と問はせられた時に、何とござるも存せぬと
 申すは不調法にあらう。というて數の定まつた物ぢやに依つ
 て、食うて見ることは成るまい。たゞ持つてまゐらうか。某の
 不調法は苦しうないが、頼うだ人の外聞がわるい。いや、頼
 うだ人の外聞にはかへられぬ。一つ食うて見よう。(二つ食う
 てさてもく)うまいことかな。このやうな栗を食うたことは
 ない。今一つ食ひたいが。今これにこげたがある。これをた
 べう。(というて食ひながらとうみな食つてしまふ。扇を叩き)やあ
 やあこりやみな食うた。頼うだ人のたゞのことではあるまい。

何と致さうぞ。いや／＼頼うだ人は正直な人ぢやほどに、面白
をかしう申しなさう。
冠「申し、ござりまするか、／＼」。主「太郎冠者何と栗は焼いたか。
冠「ままと栗焼致してござる」。主「でかいた／＼。早う見せい。
冠「先づ私の才覺オノイハを聞かせられい。お次へ持つて參つて焼かう
と存じてござるが、お次へ參つたらば定めて若子様の出でさせ
られて、こゝへもくれい、かしこへもくれいと仰せられませうぞ。
進ぜずば御機嫌がわるうござらう。又數の定まつた物でござ
るに依つて、進ずる事は成りませぬ。處でお臺所へ持つて參つ
てござれば、幸ひ火がくわつ／＼とたつてござつた。所でまん
まと焼栗に致いて、これへ持つて參りますれば、後から太郎冠者
太郎冠者と呼ばせらるゝに依つて、後をきつと見てあれば、」
謡

「毛雪頭もうせつがしらに戴き、鬢髪に黒き髪もなし。老人と老女と夫婦來り給
ひて、我はこれ竈かまどの神、三十四人の父母なり。汝栗をくれいよ。
汝栗をくれずば、ほしい物をとらすまじ。栗をくれたらば富貴
にまもらん」と、事委しく宣へば、あら尊やと思ひて、夫婦に栗を奉
る。竈の神の出でさせられてござる。主「それはめでたい事ぢ
や」。冠「其の後から三十四人の公達キミたちの出でさせられて、こゝへも
くれい、かしこへもくれいと仰せらるゝ。處で悉く進じてござ
る。主「夫婦へ進じたらば公達に進ずるに及ぶまい物を」。冠「何
が、思うても見させられい。三十四人の公達の、花を飾つて出で
させられ、楓のやうな手を出いで、こゝへもどれば、かしこへもく
れいと仰せらるゝものが、何と進ぜずに置かるゝものでござる
ぞ。主「遣はした事ならば是非に及ばぬ、残つた栗をおこせ」。冠

「もござりませぬ。主もない。冠なかく。」主先づ三十四人の公達へ三十四夫婦へ二つ、まだ四つある筈ぢや。冠それは此方の御算用がわるうござる。先づ三十四人の公達へ三十七八夫婦へ二つ。もござりませぬ。主やい總じて算用といふものは恥づかしいものぢや。三十四人の公達へ三十四夫婦へ二つ。まだ四つある筈ぢや。冠其の内に蟲の食うたが一つござつた。主「多い内ぢや程に蟲の食うたもあらう。それならば残つた三つの粟をおこせ。」冠さてはこなたは栗焼の言葉を御存じござらぬか。主「いゝや知らぬ。」冠いうて聞かせませう。謹栗焼く言葉には、言葉には、逃栗追栗灰紛れとて、三つは失せて候はず。お主殿の御心中、お恥づかしう候。主何でもない事、すさりをれ。冠「はあ。主えい。冠はあ。」

浅草紙

反故紙やぼろな
どを水につけ春
いてすいたすき
がへし紙
江戸の浅草邊か
ら出た故の名

吉村冬彦

物理學者
本名は寺田寅彦
東京帝國大學教
授
理學博士
明治九年高知縣
高知市生

九 浅草紙

吉村冬彦

十二月初めの或日、珍しくよく晴れて、そして風のちつともない午前、私は病床から這出して、縁側で日向ぼっこをして居た。都會ではめつたに見られぬ強烈な日光がぢかに顔に照りつけるのが、少し痛い程であつた。そこに乾してある蒲團からはぼかぼかと暖かい陽炎が立つて居る様であつた。濕つた庭の土からは、かすかに白い霧が立つて、それが僅かな氣紛れな風の戦ぎにあふられて小さな渦を卷いたりして居た。子供等は皆學校へ往つて居るし、他の家族も何處で何をして居るのか少しの音もしなかつた。實に静かな穩かな朝であつた。私は無我無心でぼんやりして居た。唯身體中の毛穴から暖か

い日光を吸込んで、それがこのしなびた肉體の中に滲込んで行くやうな心持をかすかに自覺して居るだけであつた。ふと氣がついて見ると、私のすぐ眼の前の縁側の端に一枚の淺草紙が落ちて居る。それはまだ新しい、ちつとも汚れて居ないのであつた。私は殆ど無意識にそれを取上げて見て居る内に、其の紙の上に現れて居る色々の斑點が眼に付きだした。紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のやうな色をして居る。片側は滑かであるが、裏側は随分ざら／＼して荒筵のやうな縞目が目立つて見える。併し日光に透かして見ると、これとは又別な、もつと細かく規則正しい簾のやうな縞目が見える。此の縞は多分紙を漉く時に纖維を沈着させる簾の痕跡であらうが、裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭大の穴が三つばかり明いて、其の周圍から喰み出した纖維が其の穴を塞がうとして手を伸ばして居た。そんな事はどうでもよいが、私の眼についたのは、此の灰色の四十平方寸ばかりの面積の上に、不規則に散在して居るさまざまの斑點であつた。先づ一番に氣の附くのは赤や青や紫や美しい色彩を帯びた斑點である。大きいのでせい／＼二三分四方、小さいのは蟲眼鏡で、も見なければならぬやうな色紙の片が漉込まれて居るのである。それが唯一様な色紙ではなくて、よく見ると其の上には色々の規則正しい模様や縞や點線が現れて居る。よくよく見て居ると、其の中の或物は状袋のたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は卷煙草の朝日の包紙の一片らしかつた。

match マッチ
 paper ペーパー
 ink インキ
 ボール紙
 英語の略
 板紙
 馬糞紙
 pasteboard

マッチのペーパーや廣告の散らし紙や、女の子のおもちやにする千代紙や、あらゆるさういふ色刷のどれかを想ひ出させるやうな片々が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補充されて、頭の中には色々な大きな色彩の模様があらはれて來た。普通の白地に黒インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せい／＼で二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると、例へば「同圓」などはいゝが「盪」などといふ妙な文字も現れて居る。それが何かの意味の深い謎でゝもあるやうな氣がするのであつた。「蛤かな」といふ新聞の俳句欄の一片らしいのが見附かつた時は少しをかしくなつて來て、つい獨りて笑つた。紙片の外にまださまざまの物の破片がくつついて居た。木綿糸の結び玉や、毛髪や、動物の毛らしいものや、ボール紙のかけら

や、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、こんなものは容易に認められるが、中にはどうしても來歴の分らない不思議な物件の斷片があつた。それから或植物の枯れた外皮と思はれるのがあつて、其の植物が何だといふことがどうしても思ひ出せなかつたりした。此等の小片は動植物界のものばかりでなく、礦物界からのものもあつた。斜に日光にすかして見ると、雲母の小片が銀色の鱗のやうにきら／＼光つて居た。段々見て行く中に此の澤山な物のかけらの歴史が可なりに面白いものゝやうに思はれて來た。何の關係もない色々な工場で製造された種々の物品が、さまざまの道を通つて或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から來た屑と混合して製紙場

Emerson (1803—1882) エマーソン
 米國の思想家で詩人
 Shakespeare (1564—1616) シェイクスピア
 英國の大戯曲家と詩人

の槽から流れ出す迄の徑路に、どれ程の複雑な世相が纏綿して居たか。かう一枚の淺草紙になつてしまつた今では、再びそれをたどつて見るやうはなかつた。私は唯漠然と日常の世界に張渡された因果の綱目の限りもない複雑さを思ひ浮かべるに過ぎなかつた。

あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのもが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にもそれに類似した過程のある事を聯想させない譯にはゆかなかつた。

そのやうな聯想から、私はふとエマーソンが「シェイクスピア論」の冒頭に書いてある言葉を思ひ出した。「價值のある獨創は他人に似ないといふ事ではない」。最大の天才は最も負債の多い

Montaigne (1533—1592) モンテーニ
 佛國の思想家

人である。こんな意味の言葉が思ひ出された。

それから又或盲目の學者がモンテーニの研究をする爲に取つた綿密な調査の方法を思ひ出した。モンテーニの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や警句や特徴や挿話を書抜き、分類し、整理した後、更に此の著者が讀んだだらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり、讀んで貰つたりして、其中に見出される典據や類型を拾ひ出すといふのである。

此の盲人の根氣と熱心に感心すると同時に、其の仕事が何處となく、私が同紙面の斑點を搜しては其の出所を詮索した事に似通つて居るやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも寧ろさういふ人の作ほど、豊富な文獻上の材料が混入して居るのは當然な事であつた。それを詮索するのは興味もあり有益な

事でもあるが、それは作と作者との價值を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされて居るか、不淨なものか、どれだけ洗はれて居るかにあつた。

魔術師でないかぎり、何も無い眞空から假令一片の淺草紙でも創造する事は出來さうに思はれない。しかし紙の材料をもつと精選し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な、平滑な、光澤があつて堅實な紙に仕上げる事は出來る筈である。マツチのペーパーや活字の斷片が其のまゝ、眼につく内は、まだ改良の餘地はある。(冬彦集)

たき火

國木田獨歩

北風を背にし、枯草白き砂山の崖に腰をかけ、足投げいだして、伊

國木田獨歩

小説家

名は哲夫

千葉縣海上郡銚

子町生

明治四十一年歿

年三十八

逗子

神奈川縣三浦郡

にある町

相模灘に臨む

鎌倉町の東南六

軒

御最後川

逗子にある田越

川の別名

六代御前

平維盛の長子

平家滅亡の後捕

へられ駿河の千

本松原で斬られ

る處を文覺上人

に助けられ髪を

剃つて妙覺と改

む頼家將軍の時

文覺非を獲て流

され妙覺も捕へ

られて田越川で

斬られた年二十

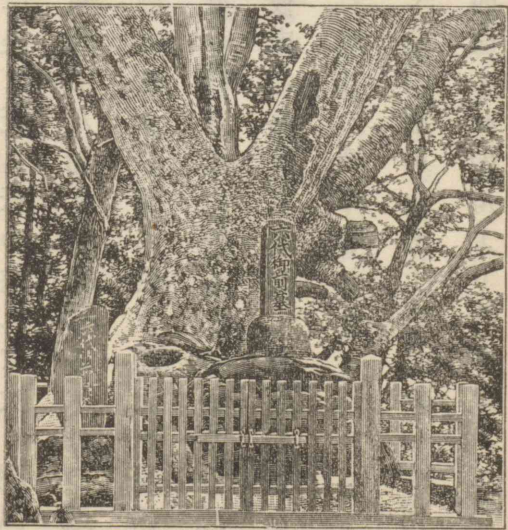
六

豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父の舟遅しと待つ逗子あたりの童の心、その寂しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて吹く潮風に騒ぐ其の根かたには、夜半の満潮に人知れず結べる水、朝の退潮に破られて残り、ひねもす解けもせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れたる足を此のほとりに停めんに、何等の感もなく行過ぎ得べきか。見よ、彼處なるは、哀れを七百年の後なる今に惹く六代御前の森なり。凧其の梢に鳴れり。

落葉を浮べて緩やかに流るゝ此の沼川を漕上る舟、知らず何れの時か心地よき。追分の節面白く此の舟より響き渡りて、霜夜の前ぶれをかなせる。あらず、あらず、只見る、何時もく、物言はぬ、笑はざる、歌はざる漢子の、農夫とも漁人とも見分け難きが寂

燈摺
逗子町から葉山
町に出ようとす
る切通になつて
ゐる小山

しげに艫あやつるのみ。
鍬かたげたる農夫の影の、橋と共に臙にこれに映る彼の舟、音も
なくこれを搔亂しゆく。見
る間に、舟は葦隠れ去るなり。
日影なほ燈摺の端にたゆた
ふ頃、川口の浅瀬を、村の若者
二人、裸馬に跨りて靜かに歩
まする、晝めきたるを見るこ
ともあり。かゝる時、濱には
見渡すかぎり、人らしきもの
の影なく、引上げたる舟の舳に止れる鳥の、聲をも立て、翼打も
のうげに鎌倉の方さして飛びゆく。



六代御前墓

或年の十二月末つ方、年は迫れども童は何時も氣樂なる風の兒
十三歳を頭に九つまでぐらゐが七八人、砂山の麓に集りて何事
をか評議まぢく、立てるもあり、砂に肱を埋めて頬杖つけるも
あり、坐れるもあり。此の時、日は西に入りぬ。
評議の事定まりけん、童等は思ひく、に波打際を駈けめぐり始
めぬ。入江の端より端へと、おのがじし見るが間に別れ散れり。
潮遠く引きたるあとに残るは朽ちたる板、縁缺けたる椀、竹の片、
柄の折れたる柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒の名残なるべ
し。童等は一々これらを拾ひ集めぬ。集めて水際を去る程よ
き處、乾ける砂の上に積みたり。積みたる物は悉く濡れ居たり。
此の寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ。日の西に入りて
より程経たり、箱根、足柄の上を包むと見えし雲は黄金色に染ま

小坪
逗子町の西端の
小漁港

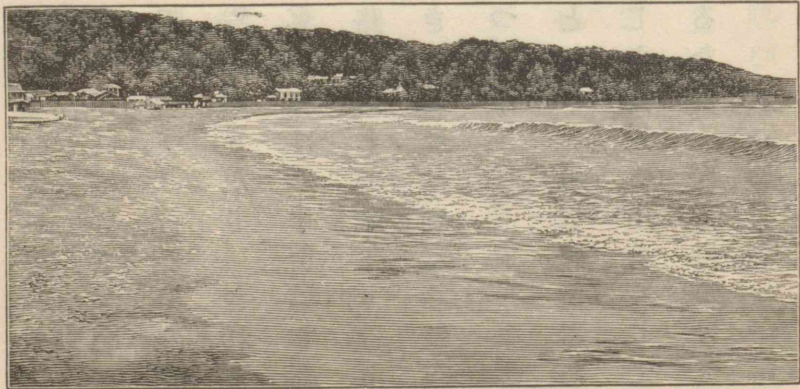
りぬ。小坪の浦に歸る漁船の風落ちて陸近ければにや、帆をおろし漕ぎゆくもあり。硝子の碎け失せたる鏡の額縁めきたるを拾ひて、これを焼くは惜しき心地す。といふ兒の圓顔、色黒けれど愛らし。「こは必ず善く燃ゆ」と、此の群の年かさなる兒、おのが力に餘る程の太き丸太を置きつゝ言へり。「其の丸太は燃えじ」と圓顔の兒いふ。「いな、燃さておくべき」と、年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、今日は獲ものゝ何時になく多き様なり」と喜ばしげに叫びぬ。童等の願は是等の獲物を燃さんことなり。赤き焰は彼等の狂喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互の誇なり。されば彼等、このたびは砂の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の兒、先に立ちて此等に火をうつせば、童等は圓く火を取巻きて立

江の島
鎌倉の西の海中
にある小島

ち、竹の節の破るゝ音を今かくと待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒に立騰りて木にも竹にも火はたやすく燃附かず。鏡の枠は僅かに焦げ、丸太の端よりは怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交るゝ砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けど、生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣きたらんごとし。沖ははや暗うなれり。江の島の影も見分け難くなりぬ。千潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方寂しく、其の姿見えぬ。と見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわたゞしく飛びゆくは鳴かの葦間よりや立ちけん。此の時、一人の童忽ち叫びていひけるは「見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり、如何なればわれらが火は燃えざるぞ」と。

童等は齊しく立ちあがりて沖の方を打守りぬ。げに相模灣を隔て、一點二點の火、鬼火かと怪しまるゝばかり、明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放てるなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時遙かに望みて泣くは實に此の火なり。「伊豆の山燃える、伊豆の山燃える」と、童等節面白く歌ひ、沖の方見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれ此の罪なき聲、たそがれ時の寂しき濱に響きわたりぬ。囁く如き波音、入江の南の端よりは白き線を立て、走り來り、これに和したり。潮は満ちそめぬ。「此の寒き夕暮に何時までか濱に遊ぶぞ」と呼ぶ聲、砂山の彼方より聞えぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、此の聲を聞くものなかりき。「歸らずや、歸らずや」と二聲三聲、引續きて聞えるに、一人の幼き兒、聞きつけて、母呼び給へり、最早打捨て、歸ら

ん」といひ、忽ち彼方に走りゆけば、残の童等また、さなり、さなり」と叫びつゝ、競うて砂山に馳登りぬ。火の燃附かざるを口惜しく思ひ、かの年嵩なる童のみは、後振返りつゝ、馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。「こは如何に、われらの火燃附きぬ」と叫べば、童等驚き怪しみ、立歸りて砂山の頂に集り、一列に並びて此方



御最後の川の口

を見おろしぬ。げに今まで燃附かざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙渦まき上り、紅の焰の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂くる音聞え、火の子舞立ちぬ。火は正しく燃附きたり。されど童等は最早此の火に還ることをせず、只喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる家路をさして馳下りけり。今は海暮れ、濱も暮れぬ。冬の寂しき夜となりぬ。此の寂しき逗子の濱に、主なき火は寂しく燃えつ。忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出で、濱傳ひに小坪街道の方へ向へるなり。火を目がけて小走に歩む其の足音重し。

噎れたる聲にて、「よき火や」と幽かに叫びつゝ、杖投捨て、忙しく背の小包を下し、兩の手を先づ焰の上にかざしぬ。其の手は震ひ、其の膝はわなゝきたり。「げに寒き夜かな。」言ふ齒の根も合はぬが如し。焰は赤く其の顔を照しぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。頭髮も髯も胡麻白にて、塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色をなせり。あはれ何處の誰ぞや。指してゆくさきは何處ぞ。行方定めぬ旅なるべし。「げに寒き夜かな。」獨りごてる時、總身を心ありげに震はせぬ。かくて温まれる掌もて心地よげに顔を摩りたり。いたく古びて處々古綿の現れたる衣の、火の近き裾のあたりより湯氣を立つるは、朝の雨に霑ひて、なほ乾きもあへざりしなるべし。「あな心地よき火や。」言ひつゝ、投げやれる杖を拾ひて、これを力

に片足を揚げ、火の上にかざしぬ。脚絆も、足袋も、紺の色あせたるのみならず、血の氣なき小指さへ現れぬ。一聲高く竹の裂くる音して、勢よく燃上れる焰は足を焦さんとす。されど翁は足を引かざりき。

「げに心地よき火や。誰が燃しつる火ぞ、忝し。」言ひさして足をかへつ。「十年の昔、樂しき爐見捨てたりしよりこのかた、未だかかる嬉しき火に遇はざりき。」言ひつゝ、火の奥を見つむるまなざしは、遠きものを眺むるが如し。火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮やかに現るゝものは子にや、孫にや。昔の火は樂しく、今の火は哀し。あらず、あらず。昔は昔、今は今。「心地よき此の火や。」言ふ聲は震ひぬ。荒々しく杖を投げやりつ。火を背にし、沖の方を前にして立ち、體をそら

せ、兩の拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大空、晴れに晴れて黒ずみ、銀河霜を包みて、遠く伊豆の岬角に垂れたり。

身うち煖くなりまさりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。あ、あ此の火、誰がもやしつる火ぞ、誰が爲にとて、誰がもやしつるぞ。今や翁の心は感謝の情に満たされて、老の眼は涙ぐみたり。風なく、波なく、さし來る潮のしみと砂を浸す音を、翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂さも此の刹那には忘れつべし。翁が心、今一たび童の昔にかへりぬ。

あはれ此の火、やうく消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは猶よく燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。たゞ立去りぎはに、名残惜しくてや、兩手もて輪をつくり、抱く様に胸のあたりまで火の上にかざ

兼好法師

俗名吉田兼好
吉野朝時代の文
學者
もと京都吉田神
社の社家

正平五年(1190)
寂
年六十九

物のあはれは

春はたゞ花のひ
とへにさくばか
りものゝあはれ
は秋ぞまされる
(拾遺集讀人不
知)

花橋は

早月待つ花橋の
香をかば昔の
人の袖の香ぞす
る(古今集讀人
不知)

人の袖の香
の香をかば昔
の人の袖の香ぞ
する(古今集讀
人不知)

三 四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變ること物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそ
そまされ。と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一き
は心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもこ
との外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌えいづる頃
より、や、春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだつほどこ
そあれ折しも雨風打續きて、心あわたしう散りすぎぬ。夏青葉
になりゆくまで、萬づにたゞ心をのみぞ惱ます。花橋は名にこ
そ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事もたちかへりこひしう思
ひ出でらる。山吹の清げに、藤の覺束なき様したる、すべて思
ひすてがたきこと多し。

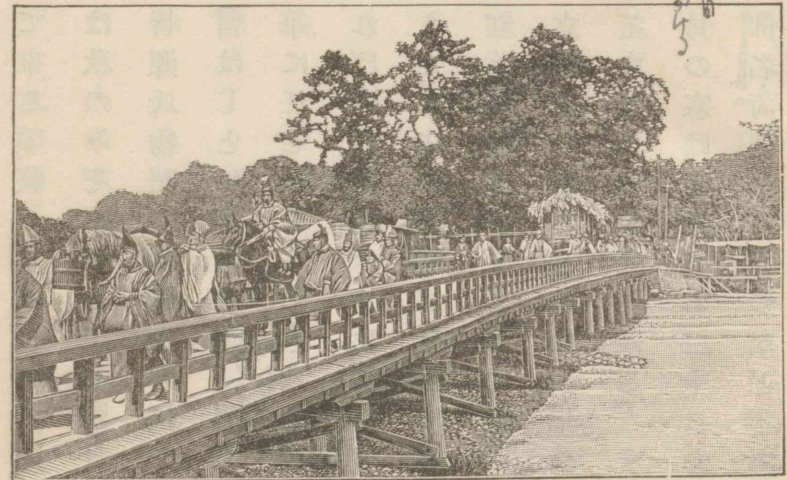
灌佛

四月八日の佛生

會
賀茂の葵祭
四月の中の酉の
日

今は五月十五日

六月被
六月の晦に行は
れる大祓の神事



夏 (列行) 祭 葵

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼し
げに茂りゆく程こそ世のあは
れも人の戀しさもまされ」と人
の仰せられしこそげにさるも
のなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗
とる頃、水雞の叩くなど心細か
らぬかは。六月の頃あやしき
家に夕顔の白く見えて蚊遣火
ふすぶるもあはれなり。六月
被たをかし。
棚機祭るこそなまめかしけれ。
やうく夜寒になる程雁鳴き

思しき事
おぼしき事いは
ぬはげにぞはら
ふくるゝこしち
しける(大鏡)

佛名
十二月十九日か
ら三日間宮中で
行はれる佛事
諸佛の名號を稱
へて罪障を懺悔
する法會
荷前の使
年の暮に諸國か
ら奉る貢の初穂
を十陵八墓に奉
られる使

て来る頃、萩の下葉色づく頃、早稲田刈りほすなど、取集めたる事
は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、
皆源氏物語枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に
言はじともあらざ。思しき事言はぬは腹ふくるゝ業なれば、
筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かへつゝやりすつべきものな
れば、人の見るべきにあらず。
さて、冬枯の景色こそ秋にはをさくゝ劣るまじけれ。汀の草に
紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の
立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃
ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき
月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御
佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。公事ども繁

追儼

十二月晦日の夜
宮中で投鬼を追
拂はれる式
四方拜
正月元日早且天
皇陛下が天地四
方を拜し給ふ式

く、春のいそぎに取重ねて催し
おこなはるゝ様ぞいみじきや。
追儼より四方拜に續くこそ面
白けれ。つごもりの夜いたう
暗きに、松どもともして夜半過
ぐるまで人の門叩き走りあり
きて、何事にかあらん事々しく
のゝしりて足を空にまどふが、
曉方よりさすがに音なくなり
ぬるこそ年の名残も心細けれ。
亡き人の来る夜とて魂祭るわ
ざは、此の頃都にはなきを、あづ



(車唐) 祭 癸

まの方には猶する事にてありしこそあはれなりこせのあはれなりしのか
かくて明けゆく空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引きか
へ珍しき心地ぞする。大路の様、松立てわたして、華やかに嬉し
げなるこそまたあはれなれ。徒然草

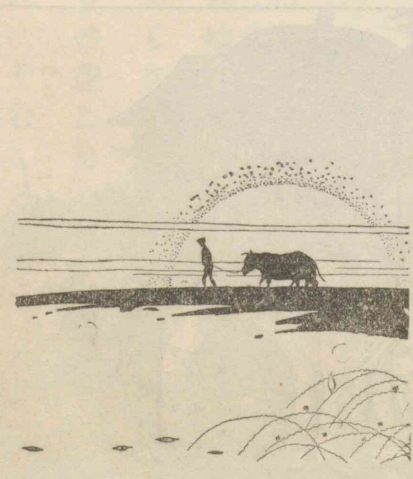
一三 夕ぐれの時

堀口大學
詩人
明治二十五年東
京生

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

それは季節にかゝはらぬ。
冬なれば煖爐のかたはら、
夏なれば大樹の木かげ。

二句
夕暮の時は
静寂の心
静寂



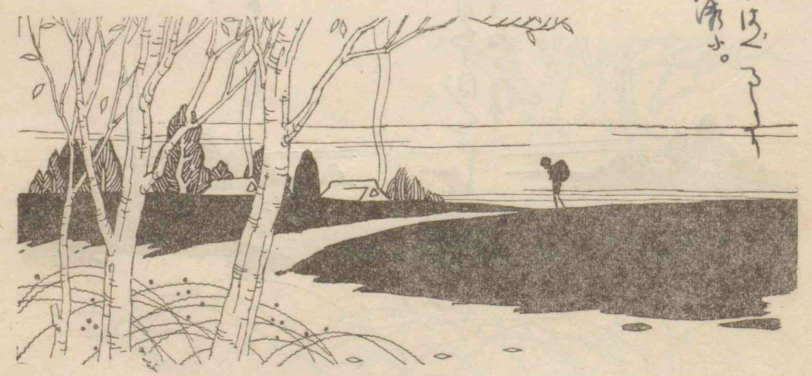
堀口大學

夕暮の時は

それはいつも神祕に満ち、
それはいつも人の心を誘ふ。心は人の心を誘ふ。

静寂を愛することを
知つてゐるものゝやうに、
小聲にさゝやき、小聲にかたる。
ときにしほく
静寂

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。
若さにほふ人々のためには、



三
誰か
誰か
誰か

それは愛撫に満ちたひと時。
 それはやさしさに溢れたひと時。
 それは希望でいつぱいなひと時。
 また青春の夢とほく
 失ひはてた人々のためには、
 それはやさしい思出のひと時。
 それは過ぎ去つた夢の酩酊。
 それは今日の心には痛いけれど、
 しかも全く忘れかねた
 そのかみの日の懐かしいひと時。



四
か
感激

境界の狭いひと時。

五
夏
夏
夏

手紙の
神妙
静寂
老若の感
何れも
静寂

かぎりなくやさしいひと時。
 夕ぐれのこの憂鬱はどこから来るのだらうか。
 誰もそれを知らぬ。
 (お！誰が何を知つてゐるものか。
 これは夜とともに密度を増し、
 人をより強き夢幻へみちびく。
 夕ぐれの時はよい時、
 限りなくやさしいひと時。(遠き薔薇)



伴蒿蹊 江戸の人
國學者
名は資芳
近江八幡生
文化三年(四六六)
歿
年七十四

春滿
國學四大人の一
山城伏見稻荷神
社の社家
元文元年(三九六)
卒
年六十九

萬葉集
二十卷
奈良時代の歌を
集めたもの
新古今集
二十卷
藤原定家家隆等
の撰んだ平安末

契沖
國學者
萬葉集代匠記を
著す
大坂圓珠庵に住
す
元祿十四年(三
三)歿
年六十四

一四 賀茂眞淵

賀茂眞淵
遠州濱松の人

伴 蒿 蹊

眞淵は姓賀茂縣主岡部衛士と名のる。遠州濱松の人。春滿に
從ひ家僕のごとくして京都に學ぶこと年あり。學成りて江戸
に下り、大いに古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへど
も、歌はその風をよまず。在滿は、萬葉の頃は文華いまだ開けず、
歌の盛は新古今集の時なり。といへり。眞淵に及びてはじめて
萬葉の風をよみうつし、文章も亦古言をもて綴り、一家を成し、世
の耳目を驚かす。從ひ學ぶもの多し。
その説に、契沖は新習しつれど未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎ
しこそ惜しけれ。大人は歌のみかは舊りぬるちの書どもを
あらすきかへし、いたづきのかひ、さはなれども、まだ刈りをさ
め果てざるに病に臥しつ。などいひておのれこれがなりはひを
病めるの歎ともつらかぢしものなり。自かかふ(うめり)



(藏園柏竹) 淵 眞 茂 賀

遂ぐる由なり。實に古を發揮して後生を誘ふ功少からず。其
の證をいはゞ、或時南郭服部氏を訪ひて物語らふついで、唐詩の
風韻衰へて六朝に及ばぬは、汾上驚秋の詩にて知りぬ。といふ。
南郭いかにと問ふ。さればよ、北
風吹白雲萬里度、河汾といへる起
承の句、誠に羈旅の秋情言はん方
なきに、心緒逢搖落、秋聲不可聞の
轉合の句、上の意を注せしに、氣格
は畢處杯杯、味身清、故、竹鳴、秋、海、香、周、
の落ちたるを覺ゆ。吾が邦の歌、
唐の如しといへば、南郭も大いに感服せりとなり。又山部赤人、
の歌、

本居宣長
國學四大人の一
家の號は鈴の屋
伊勢松坂生
享和元年(二四六)
薨
年七十二

一五 縣居大人の御諭し言 本居宣長

宣長三十あまりなりしほど、縣居大人の教をうけたまはりしめ
しころより、古事記の註釋を物せんものせんとすの志ありて、その事大人にも



本居宣長

聞えけるに、諭し給へりしやうは、
「われも素より、神の御典を説かん
と思ふ志あるを、そはまづ漢意を
清く離れて、古のまことの意を尋
ね得ずばあるべからず。然るに
その古の意を得んことは、古言を

得たる上ならでは能はず、古言を得んことは、萬葉をよく明らむ
るにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉を明らめんとす
る程に、すでに年老いて、のこりの齡今いくばくもあらざれば、神

勤

依之

の御典を説くまでに至ることえざるを、いましは年さかりにて、
行先長ければ、今より怠ることなく、勤しみ學びなば、その志遂ぐ
ることあるべし。但し世の中の物學ぶともがらを見るに、皆ひ
きき所を經ずて、まだきに高きところに登らんとする程に、ひき
き所をだに得ることあたはず、まして高き所は、得べきやうなけ
れば、みなひがごとのみすめり。此の旨を忘れず、心にしめて、ま
づひき、所よりよく固めおきてこそ、高き所には登るべきわざ
なれ。わがわがいまだ神の御典をえ説かざるは、もはら此の故ぞ。
ゆめ級をこえて、まだきに高き所をな望みそと、いとねもごろに
なん誠め諭し給ひたりし。此の御諭し言の、いと貴く覺えける
まゝに、いよ、萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひ
質して、古の意詞をさとりえて見れば、まことに世の物知人とい

下河邊長流

大阪の國學者
貞享三年(三三六)
歿
年六十三

一六 天つ星

下河邊長流

ふものゝ神の御典説ける趣は、みなあらぬ漢意のみにして、さら
にまことの意は、方休神侍りらるるに、つらばらぬ。え得ぬものになんありける。

(本居宣長全集——玉かつま)

宣長の明：
徒然喜り如く

天つ星おちて石ともならぬ間やしばしかはべの螢なるら

ん（燈籠のあつらふ。）（燈籠のつらばらぬ。）富士のねに登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざ

りけり（地をたふさるる。）

梅の花おぼろ月夜ににほふなり常にもがも（作）なこの（契沖）ごろに
不様

しまま川

飾磨川
播磨國飾磨郡の
歌枕

筆蹟

鶴

有渡濱の松より
たかく行く鶴も
雲居にかへる天
の羽衣
契沖

して

野邊のつゆ山のしづくもしまま川海に出でてはかはらざ
りけり

（鳥のつらばらぬ。）

契沖筆蹟

契沖筆蹟

荷田春満

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道

かは（唐鳥）嵐（唐鳥）ふく音もおよばぬ雲のうへは（唐鳥）いかにしづく月（唐鳥）のすむ

らん

（契沖）

隱士松翁
傳未詳

茶摘川

奈良縣吉野郡國
樺村大字茶摘地
方を流れてゐる
吉野川の名

實爲

藤原氏
後村上天皇に仕
へて大納言内大
臣となる

忠行
民部大輔
傳未詳

ひろなりの御子のいまだ幼うおはしましける時に、若き殿上人
數多伴なはせ給ひて、茶摘の河淀のほとりにて、鷹使はせて御覽
ありけるに、傍にいと大きな岩のえもいはずおもしろきに小
松の生ひいてたるありけり。御子御覽ぜさせて、この岩を歸り
なん時、皇居の御庭にもてまゐれ、うへに奉らん。と實爲中將にの
たまはせければ、をさなき御心を推しはかりて、御事うけせさせ
たまふ。

鳥など數多取らせ給ひて歸らせ給へる時に、忠行侍從に「岩を忘
れ給ひし。」とのたまはせければ、民部大輔が力も強く侍れば御あ
とよりもて參り候なり。」と啓して皇居に入らせ給ふ。御鷹の鳥
など奉らせ給ひて、實爲中將に「ありつる岩を。」と召させ給ひける
に、忠行の侍從の仰言を承りぬ。」と啓し給へば、侍從を召して「如何

に。」と尋ねさせけるに、民部大輔の御後よりもてまゐらんといひ
つる。民部を召させ給ひなん。」とのたまはせて、むづからせ給ひ
て、中將にこそよく言ひつれ。などさは言ふにか。」としをれさせ
給ひければ、中將のありつることを啓し給へば、をかしがらせ給
ひて、まことに面白からん岩こそ見まくほしけれ。民部が力こ
そゆゝしければ、もて來なんに、召させ給へ。」とのたまはするに、中
將立ち給ひて、民部大輔に「かゝる事なんある。如何してん。」との
たまへば、すべきことこそあれ。」とて、御庭にありける小さき岩に、
松の枝を取付けて、中將といと重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉
れば、小さくこそあれ、それにはあらじ。」となほむづからせ候ひけ
れば、民部大輔「さればこそ、その岩を持ちて上の山を通り候ひし
に、右左より山のさし出でて、道のいと狭き處にて叶ひがたく、い

かにせましとたゞよひ侍りしに、向ひのかたより山伏の來たりけるが、岩にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ。とのゝしりけるほどに、我もせんかたなきに、かくて侍る。如何にせまし。とわびあへるに、さらばすべきことこそあれ。とて、數珠をおしもみ、何やらんつぶやきて祈るに、隨ひてこの岩小さくなりて、やすく通りて候ひしほどに、山伏も行過ぎしを呼びかへして、もとの如くに祈りなほしてん。といひければ、また行く先に細き道のいますれば、いかゞし給はん。といひしほどに、げにもと思ひはべりて、そのまゝ持て参りぬ。と言ひ給へば、うへより始めてありつる人、をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、げにさもあらんことなり。その山伏を召しかへせかし。とのたまはするに、はや遙かに行過ぎて、いづち行くらんも知らず。と啓し

鴨越

神戸市西北方の山徑

七日

安徳天皇壽永三年(八四〇)二月七日

鷲尾

三郎經春

一谷

神戸市の西部にある谷

又その西方に二谷三谷がある

たまへば、ほいなきことにこそあれ。とゞめて民部大輔の大きな空言を、少しきやうに祈らせんものを。とのたまはせける。まことに行末たのもしき御ことにこそいとせめて覚えはべりしか。(吉野拾遺)

一八 鴨越

同じき七日の曉、九郎義經は鷲尾を先陣として、一谷の後鴨越へぞ向ひける。頃は二月の初めなり、霞の衣たちへだて、緑を添ふる山の端に、白雲絶えん、聳えつゝ、先づ咲く花かとあやまたる。未だ歩みなれぬ山路なり、行末はそこと知らねども、征く馬の足に任せつゝ、各先にと進みけり。まだ仄暗き程なり、道には泥みけれども、矢合はせ時を定めれば、明くるを待つに及ばずして、

谷に下り峯に登り、引懸けく、打ちけるに、一谷の後に篠が谷といふ處に人の音しければ、押寄せて「何者ぞ」と問ふ。名乗ることはなく、散々に射ければ、此奴原は平家の雜兵にこそあるらめ、一々に搦め捕つて首を斬り、軍神に祭れ」とて源氏も散々に射ければ、此處にて平家多く討たれにけり。

其の後鷲尾尋承にて下り上り打つ程に、辰の半ばに鴨越、一谷の上、鉢伏、磯の途と云ふ處に打登る。兵ども遙かにさしのぞきて谷を見れば、軍陣には楯を並べ突き、士卒は矢束をくつろげたり。前は海、後は山、波も嵐も音合はせ、左は須磨、右は明石、月の光も優ならん。追手の軍は半ばと見えたり。喚き叫ぶ聲、射違ふ鎗の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗赤符立て並べて、春風に靡く有様は、劫火の地を焼くらんもかくやと覺えたり。

辰の半ば
午前九時ごろ

劫火
佛敎の語
世界の破滅する
時起る大火災

佐藤三郎兵衛
名は繼信
屋島で討死

白覆輪
刀の鞘鞍等の縁
を金銀などで覆
ひ飾るを覆輪と
いふ
白覆輪は銀
黄覆輪は金

時已によくなりたり。大手に力を合はせんとて見下せば、實に上七八段は小石交りの白砂なり。馬の足留るべき様なし。徒歩にても馬にても落すべき處に非ず。さればとて、さてあるべき事ならねば、只今まで乗りたりける大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乗せ、我が身は大夫と云ふ馬に乗替へて、谷へ打向け給ひ、鹿の通路は馬の馬場ぞ。各落せくと勧め給ふ。兵ども我もくと馬をば谷へ引向けて、心は先陣と逸れども、流石いぶせき磔なれば、手綱を控へてやすらへば、馬も恐れて退きけり。互に顔と顔とを見合はせて、何處を落すべしとも見えず。軍將宣ひけるは、一つは馬の落様をも見、一つは源平の占形なるべし」とて、葦毛の馬に白覆輪、白ければ白旗に準へて源氏とし、鹿毛の馬に黄覆輪、赤ければ赤旗に準へて平氏とて追下す。各、木の間にて是を

越中前司盛俊
盛國の子
一谷で戦死

見る。上七八段は小石交りの白砂なれば、轉ぶともなく落つるともなく下りつゝ巖の上にぞ落着きたる。稍暫くあつて、岩の上より轉び下り、越中前司盛俊が假屋の後に落着きて、源氏の馬は這起きつゝ、身振ひして峰の方を守り、二聲嘶え、篠草食みて立つたり。平家の馬は身を打損じ、臥して再び起きざりけり。城中には是を見て、敵の寄すればこそ鞍置馬は下るらめ。とて騒ぎ迷ひける處に、御曹司は、源氏の占形こそめでたけれ、平家の軍、左様あるべし。人だに心得て落すならば、過ち更にあるまじ、落せ落せ。と宣へども、我だに恐れて落さねば、人も恐れてえ落さず。白旗五十旒ばかり梢に打立て、宣ひけるは、守つて時を移すべきに非ず。碓を落すには手綱數多あり。馬に乗るには、一に心二に手綱、三に鞭、四に鐙といひて四つの義あれども、所詮心をも

ちて乗るものぞ。若き殿原は見も習へ、乗りも習へ、義經が馬の立て様を本ほんにせよ。とて眞逆に引向け、續けく。と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて、流れ落しに下したり。三千餘騎の兵ども、大將軍に續け。とて、白旗三十旒、城の内へ指覆ひ、轡並べて手綱かいくり、同じ様に尻足敷かせて、さと落して、壇の上にぞ落留る。それより底をさしのぞいて見れば、石巖峙つて苔むせり。刀の刃に草覆へる様なれば、いといふせき上、二十丈もやあるらんと見え渡る。下へ落すべき様もなし、上へ上るべき便もなし。互に堅唾を呑みて思ひ煩へる處に、三浦黨に佐原十郎義連進み出でて、我等甲斐信濃へ越えて狩し、鷹使ふ時は、兎一つ起いても鳥一つ立て、も、傍輩に見落されじと思ふには、是に劣る處やある。義連仕らん。とて手綱搔か繰り鐙踏張り、只一騎眞先蒐けて落

畠山

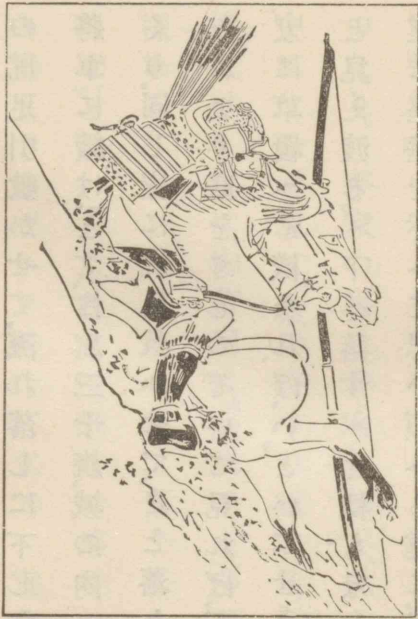
莊司重忠

護田鳥尾

鶯の羽に薄黒い
文があつてうす
べう（おすめど
り）の羽に似て
ゐるもの

鞭打

馬の横腹の鞭の
當る部分



（實故賢前）る下を越鴨連義原佐

す。御曹司是を見給ひて、義連討たすな。つゞけ、者ども、つゞけ、
者ども」と下知して、我が身も續きて落されけり。
畠山は赤緘の鎧に護田鳥尾の矢負ひ、三日月と云ふ栗毛馬の太
く逞しきに乗つたりけり。此の馬鞭打に三日
の月程なる月影のあり
ければ名を得たり。壇
の上にて馬より下り、さ
しのぞいて申しけるは、
「こゝは大事の悪所、馬轉
ばしては悪しかるべし。『親にかゝる時子にかゝる折。』と云ふ事
あり、今日は馬を勞らんとて、手綱、腹帶、縫り合せて、七寸に餘りて

大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負うて、椎の
木のすだち一本、振切り杖につき、岩の迫をしづくとこそ下り
けれ。東八箇國に大力とは云ひけれども、只今かゝる振舞人倫
にはあらず、まことに鬼神の所爲とぞ、上下舌を振ひける。畠山
は「此の岩石に馬損じては不便なり。日頃は汝にかゝりき、今日
は汝を孚まん」と云ひける、情深しと覺えたり。其の後三千餘騎、
手綱搔繰り、鐙踏張り、手を握り、目を塞ぎ、馬に任せ人に随つて、劣
らじ劣らじと落しけるに、然るべき八幡大菩薩の御計らひにや
と申しながら、馬も人も損ぜざりけるこそ不思議なれ。
落しもはてず、白旗三十旒さと捧げ、三千餘騎同時に鬨を作る。
山彦答へて夥し。平家の城郭に亂れ入りて、豎ざま横ざま、蜘蛛
手十文字に馳廻り、喚き叫んで戦ひければ、城中には東西の城戸

小具足
小手脇當脇楯だ
け着けたこと

口ばかりこそ防ぎけれ、さしも恐しき巖石より敵寄すべしとも
思はざりければ、打延べて、左右の城戸口の弱からん時軍せん。と
て、鎧物具脱ぎ置きて、小具足ばかりにて居たる處へ、はと寄せ、ど
つと鬨を作りたれば、弓矢を取り馬に乗る隙を失ひ、あわて迷ひ、
味方の兵も皆敵に見えければ、適馬に乗り弓矢を番ひける者も、
味方討に討殺され斬殺されて、上になり下になつて、肝も心も身
にそはず、度を失ひ騒ぎふためきける有様は、少魚のたまり水に
集り、宿鳥の枝を争ふに異ならず。
御曹司下知し給ひけるは、城郭廣博なり、敵その數を知らず、多く
我が軍を滅さんこと、最も不便なり。火を放て。と宣へば、武藏坊
辨慶、屋形に打入り、假屋に火をさす。折節西の風烈しくして、猛
火城の上へ吹覆ふ。平家の軍兵、煙に咽び火に責められて、今は

敵を防ぐに及ばず、取るものも取敢へず、濱の汀に逃出てつゝ、海
の藻鹽に馳入つて、船に乗らんとぞ迷ひける。助舟も多くあり
けれども、そも然るべき人々をこそ乗せけれ、次々の者どもをば
乗せざりければ、乗らん乗せじとする程に、多く海にぞ沈みける。
猛火の煙、蹴立の灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵にぞ討たれ
ける。されば助るは希に、亡ぶるは多し。無慙と云ふもおろか
なり。(源平盛衰記)

一九 扇の的

さる程に、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそ
この峯、この洞より十四五騎、二十騎打連れ、馳來る程に、判
官程なく三百餘騎になりたまひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決

さる程に
安徳天皇壽永四
年(八四〇)二月十
八日源義經がわ
づか百五十騎を
率ゐて阿波から
急に讃岐の屋島
へ押寄せて來た
判官
檢非違使尉源義
經

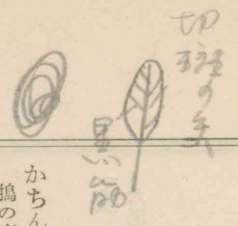
化城 柳 表白裏青 俗にいふ十二

柳 表白裏青 俗にいふ十二 せがい 船棚

手だれ 手き 上手 與一 資隆の第十一子 與一は餘一の宛 字

すべからず。とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。「あれは如何に」と見るところに、船の中より年の齡十八九ばかりなる女房の柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挟みて陸へ向つてぞ招きける。

判官後藤兵衛實基を召して、あれは如何に。とのたまへば、射よとこそ候らめ。たゞし大將軍の、矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。とまをしければ、判官味方に射つべき仁は誰かある。と問ひたまへば、手だれども多く候なかに下野の國の住人那須太郎資隆が子に與一宗隆こそ小兵に



かちん 搗の意 藍を搗ちて染めた紺色 おくび 榘 はたそで 端袖 袖一幅半のうち 袖口の方半幅 足白の太刀 緒をとほす金具を銀でつくつた 太刀 ぬための鏑 鹿の角で作つた 鏑矢

ては候へども、手はきいて候。と申す。判官證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争ひて三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官さらば與一を呼べ。とて召されけり。

與一その頃はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を以ておくびはたそでいろへたる直垂に萌黄緘の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合はせてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。判官、いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き味方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁に仰せつけらるべうもや候らんと申しければ、判官大いに怒つて、今度鎌

一九 扇の的

倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾うく鎌倉へ歸らるべし。とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば悪しかりなんとや思ひけん。さ候は、外れんをば存じ候はず、御説で候へば仕つてこそ見候はめ。とて御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

味方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、此の若者一定仕らうずると覺え候。と申しげれば判官も頼しげにぞ見たまひける。

矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

まろほや
やどりぎを圓く
描いたもの

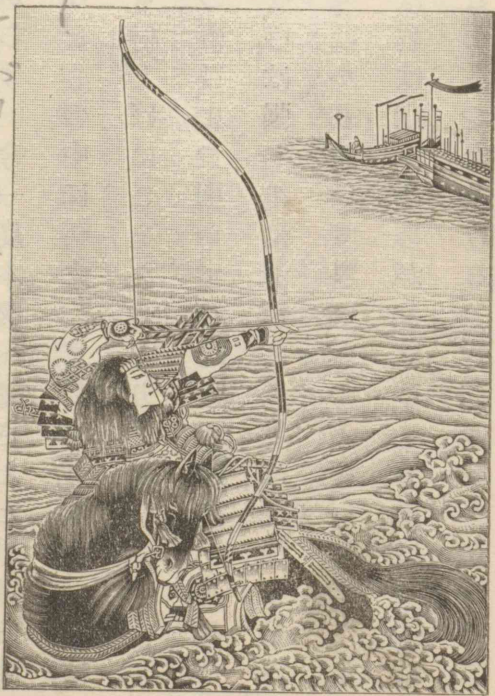
一段
六間

日光權現
下野國日光山に
鎮座する二荒山
神社

頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯打つ浪も高かりけり。舟は揺り上げ、揺り据ゑ漂へば、扇も杭に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す、陸には源氏轡を並べてこれを見る。

何れも何れも晴ならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權



那須與一扇の的を射る

宇都宮
宇都宮市に鎮座
する二荒山神社
那須湯泉大明
神
下野國那須郡那
須村湯本の湯泉
神社

東
田指

現宇都宮那須湯泉大明神願はくはあの扇の眞中射させてたば
せたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して、人に
再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この
矢外させたまふな。と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も
少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。
與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ
條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過た
ず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑
は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一揉、二揉、揉
まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、
白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲
いて感じたり、陸には源氏箴を敲いてどよめきけり。(平家物語)

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(三五七)
江戸生

二〇 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霰も天より降るもの、面白からぬは無
きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰
色の雲の、大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程はともあれ
かくもあれ、そと下す風に連れて、ちらく、と降出づる始めより
檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつくすまで、いづれかをかしか
らざらん。
まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉
に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらく、と
降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の、大きく
軽らかに降りて落つる間もなく、色なき水の昔にかへる淡々し

鹿子斑
時知らぬ山は富士のねいつとて
かかのこまだらに雪の降るらむ
(在原業平)

筆蹟

江上午景
山古りて樹重ねて新に浅みどり
又深みどり風寝ねて雲猶あゆみ
水光りまた水くもる

露伴漫吟

江上午景

山古りて 樹重ねて 新

浅みどり 又深みどり

風寝ねて 雲猶あゆみ

水光りまた水くもる

幸 田 露 伴 筆 蹟

露伴漫吟

さもなつかしく消えつゝも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松梅樅などの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけ春の初めの頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時の事なり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく、且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その霏

霏紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には、廣きところより狭きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして廣きは却て狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡くして鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき

馬をさへ眺むる
雪のあしたかな
(芭蕉)

梅尾
榎尾
共に京都市の西
北方にある紅葉
の名所
高尾を合せて三
尾といふ
寢覺床
長野縣西筑摩郡
駒根村臨川寺
木曾川の岩床



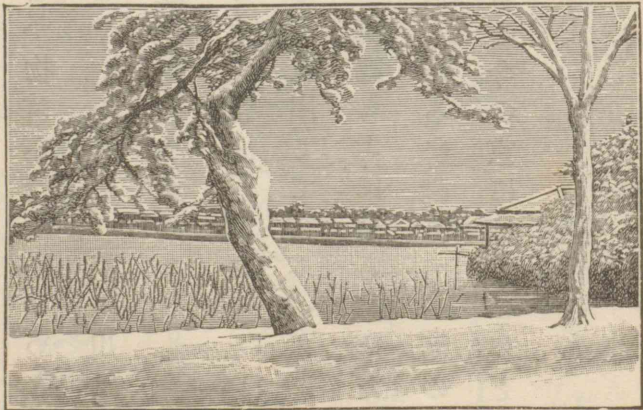
會の寢覺床の巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛

雪くおもはる。「馬をさへ眺むる」と
人の云ひたる旦、朝日の光いと花
やかなるに、疎林に、禽起つて飛ん
でまた還る、有りふれたる郊外の
さまながらもよし。

寺 閣 金 の
西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎東
山・清水皆畫とすべし。梅尾・榎尾
は見ねば知らぬぞ口惜しき。木

山王臺
麴町區にある小
丘
日枝神社のある
處
溜池
山王臺の東南麓
にあつたが今は
埋められて宅地
になつた

へて一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の
簪を戴ける松の村立のあたり、姿
をも見せて名をも知らぬ山の禽
の餓を鳴きたるなんと、二十年の
昔の、余の胸に鮮かなり。
東の京に御溝の水おだやかに、浮
寝の禽の夢も安けく雪に閑かな
る大御代の午、また比無くめでた
し。山王臺今猶好からんが溜池
の有りし昔いたづらになつかし。
不忍池の一望千頃の景はいはず
もあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷



冬の 不 忍 池

待乳山

隅田川の右岸
隅田公園の一部

相生橋

深川區越中島か
ら京橋區新佃島
に渡した橋

高山樗牛

評論家
名は林次郎
文學博士
山形縣鶴岡市生
明治三十五年歿
年三十二

の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとやいふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心錄)

二 友に寄す

高山樗牛

如何濟暮しなるを思ひや此方お愛らず
碌々羅在の間餘事をがら濟安心下され
たく此頃も事に紛れぬ無沙汰し
打過ぎ外毎度勝手の手の事のみ濟頼
申上げ市面倒察入徹徒然の折に
物ほしきやう色々注文申之れども實
際手にとるは稀し中座外水彩畫少くも
描きみんとて先頃繪具など取寄せ候

魚見崎
熱海町の南端に
ある岬
真鶴崎
神奈川県足柄下
郡にある岬
熱海の東北十二
軒餘

つゞも是また手に觸れず小顧これぞ我を
から候くも暮しつるこれれと思されけ
へどもそこれくををのくに樂しく過し
申儀

小生の室は熱海中ふそ景も眺望よき處
にて魚見崎より真鶴崎まで雙眸の裏
よ萃る朝日影さし入る頃に起き出でて
九時頃より濱道をぞ散歩致し午後は

ハイネ
Heinrich Heine
(1797—1856)
獨逸の詩人

園藝大弓等に費をの毎日此例は時時に
去一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
に仰臥し大海の浩蕩小恙して朗吟する
ことも亦座の或は日暮の空ひより磯邊乃
松に腰お懸きて夢ともなく現ともなき思
に耽ることもこれあり候がや自然の無盡
藏なる今はた驚かるるもつりに亦座を
我も人を自然と口には言へ幾人か

がめれへど缺月をさうら一隅むかへ海と離れ
 言ふむよりなくめでたき景色をさへひりか
 ば下女に命じて雨戸をあきさせ欄干
 よりてハイネを朗吟致す其時の心地よさ
 あはれわれのあまも石も金にもなほか
 思ふれひき
 貴兄等ハさぞか一日と清勉學の由事なら
 んと羨おの申す時ふも清文賜ひはつゝの

し病氣も大方も宜しく小間心配下さ
 るまじく候申上げたき事山におきあ
 り能へどもまづこれこそ筆をとめ候

(樗牛全集)

三三 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南
 風薫ざる日、友に擁せられて家を辭し故國に別れしは恰も今日
 の此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上艇中相隔り
 ては面も定かならず姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。「健
 在なれ。」再び早く相見ん」との別の言葉は尙耳に響き、最後の握

姉崎嘲風
 宗教學者
 名は正治
 東京帝國大學教
 授
 文學博士
 明治五年京都生
 友
 高山樗牛

清見瀉
静岡縣庵原郡興
津町

手今尙掌に感ぜられつゝも、見わたせば白鷗飛びかふ海の面渺
として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、か
くて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方足
柄を過ぎて清見瀉のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿
りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今
日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復
相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ま
しむ。

三月
明治三十三年

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を
踰えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の悶を遣りた
りき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。
中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなき

を歎きぬ。

有渡の山
静岡縣安倍郡久
能山の別稱
袖師の松原
三保松原の一部
埋骨の地
静岡縣安倍郡不
二見村龍華寺

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に遣
し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有
渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨
の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せる
が如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此
の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光
昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や
尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑
を撫で、今夜、五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚
呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を
遣らん。



龍華寺から見た富士山

されど徒に憂ふるを已めよ。
 人に百歳の齡なく、世に別離な
 き人はあらじ。生死は世の常
 なり。別離は却て懷慕の樂し
 みを深からしめ、懷慕は時と處
 との隔を越えて神相接せしむ。
 友こゝにあり、悠久の夜亦こゝ
 にあり。彼が遺文餘薰新にし
 て、我が思慕日毎に彼に通ず。
 清見灣頭今宵雨しめやかにし
 て夜靜かなり。形は見えねど
 彼は我と語り、我は彼に接し、松

三世
 過去現在未來

我が友
 京都帝國大學教
 授文學博士藤井
 健治郎

西郷
 西郷隆盛
 大久保
 大久保利通
 山本有三
 劇作家
 明治二十年栃木
 縣栃木町生

風濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼平生憂を同じうせる彼と
 予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相
 異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴なはん。
 歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接
 しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我
 も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉
 の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊
 に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一
 夜の眠に入らん。(停雲集)

三三 西郷と大久保

山本有三

大久保邸客間。

第一幕と同じ部屋。床に

相看（まがみ）兩不厭（ふふ）

只有敬亭山

と大書した幅が懸つてゐる。

伊藤が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で、幅などを見
てゐる。

家令が這入つて来る。

家令「大變お待ちを願ひまして。もう間もなくお歸りになると
存じますが、……」

伊藤「いや。——先程から感服してゐるんですが、見事な書ですね。
（幅の近くに寄り）雪篷といふのはどういふ人です。」

家令「何でも西郷さんが沖の永良部島へ島流しにおなりになつ
た時、この方もそこにおいてになつたので、お知合になつたの

相看

衆鳥高飛盡、孤
雲獨去閑。相看
兩不厭、只有
敬亭山。

（唐の李白の獨
坐敬亭山の詩）

伊藤

伊藤博文

雪篷

川口氏

鹿兒島藩士

詩人で書家

西郷家の執事と

して世を終へた

沖の永良部島

奄美列島の一

徳之島の南西に

ある方八軒禾満

の孤島

屋久の永良部島

に對してかくい

だとか伺つて居ります。たしか西郷さんはこのお方からい
くらか書をお習ひになつたのぢやございませんかな。

伊藤「ふん。それにこの句がいゝ。『相看て兩ながら厭はず。只
敬亭山あり。』實にいゝ句だ。」

家令「雪篷といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執り
になると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、
お歸りになりました。」

（大久保が這入つて来る。）

大久保「どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。」

伊藤「少々御意嚮を伺ひたいことがございまして。」
大久保「さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……」

伊藤「あ、あの件ですか。如何でした。お引受になりましたか。」

勝

勝安芳

征韓派の面々
西郷隆盛
板垣退助
江藤新平
後藤象次郎
副島種臣

岩倉公
岩倉具視

大久保「それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐ後繼内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なあに、五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。」

伊藤「實はその辭任問題について上りましたのですが、西郷さんの辭表はどう裁きましたものでせう。」

大久保「それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。」

伊藤「辭任を聽届けようといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございますからな、岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰になつてをりますのですが……」

大久保「いや、引留める要はありません。罷めたいといふものは罷

黒田
黒田清隆

めさせる方が却てよろしい。その方が當人のためです。」

伊藤「けれども、それは如何にも忍びないことですから……」

大久保「いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとしたとて留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたではありませんか。」

伊藤「それはさうですが……」

大久保「陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、參議並に近衛都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。」

伊藤「なほ躊躇しながら」「それでよろしうございますかな。」

大久保「きつぱり」「よろしいですとも。」

伊藤「西郷さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留め

になるお方と思つてをりました。御意見の相違は相違、これはこれで、また別ですからな。

大久保「いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めない者こそ彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。氣儘にさせておやりなさい。その方が却て西郷もうるさくはないでせう。」

伊藤「さうですか。」

大久保「わたしはいつかはかういふ日の來ることを臆げながら豫期してゐました。今回のことがなくとも、これは早晚免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。このことは戊辰の役に於て鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間で

す。當然離れるべき運星なのです。」

伊藤「併しお二人は今日まで殆ど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。」

大久保「御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたから



大久保利通

です。夏のさ中に雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒に就いて、時候が追々定まつてくれば、夏は夏、冬は冬、それ／＼その位置に歸るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ然るべきものだとなつたしは思つてゐます。」

伊藤「西郷さんもさう思つてお出で、せうか。」

大久保「さ、西郷はどう思つてゐますか。」

(問)

大久保「伊藤君、西郷が今度どうしてあんなに向きになつたのか、知つてゐますか。」

伊藤「向きになつたといひますと……」

大久保「あの男はいつも黙々としてをつて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、あなたのいゝやうに。」さういつて決して逆らつたことがありません。功は人に譲り、自分ほうしるに引下つてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかせませんでしたか。」

伊藤「自分の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思

つてをりましたが……」

大久保「それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつ

たのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。」

伊藤。(無言。大久保の顔を覗くやうに見る。)



Le Chrysone

西郷 隆盛

大久保「あの男は死を急いでをるので。いつか私にこんなことをいつたことがあります。『己はもう、一度死んだのだから、天地に家はないのだ。』知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だ

順聖公
島津齊彬

三郎公
島津久光

け助つた、あのことをいふのです。伊藤「存じてをります。」大久保「それからまた自分を取立て、下すつた順聖公様がおかれになつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主に後れ、同志に後れてゐるといふ慚愧の念が絶えず頭にあるのです。その上現在、三郎公にはひどく疎まれてをりますし……」伊藤「なるほど……」大久保「ですからどうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるのです。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なし

てやりたく思ひます。死なしてやるのが、寧ろ西郷を生かしてやることのやうにも思ひました。併しわたしまでがそんな心に引入られるやうであつてはなりません。どんな事をして、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局から申すまでもなく、西郷一身の爲から申しても、斷じて彼を死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしをも怨んでゐるでせう。併しどんなに、どんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。……ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。」伊藤「あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。」

大久保「わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁

度西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもと／＼御覺がよくないところへ、憂國の心からとは申せ、お言附を待たないで、西郷が少し取計らつたことをした爲に、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つく／＼世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんなことになつては、もう討幕の望も何もない。こんな位ならいつそのこと、二人刺違へて死んでしまつた方がましだ、さう決心して彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです。」

伊藤「それが今度は思はない事で刺違へてしまつたわけですね。大久保、人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつ

た。西郷がいつかわたしにいつたことがあります。『人間は死なうとしてもなか／＼死ねるものでなく、生きようとしても案外生きられないものだ』それを聞いた時には、それ程にも思ひませんでした、わたしは今その言葉をしみ／＼思ひ出します。』

書生が這入つて来る。

書生「あの、西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。」

大久保「國へか。」

書生「はい。只今役所から知らせて参りました。」

大久保「さうか。——たうとう歸つてしまつたか。」

伊藤「すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰つた通りにするより外はありませんな。」

大久保(うなづく)

伊藤「では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。」

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

筆蹟
クシテ、ヲ、ツ、
盡人事、俟天命
命一 南洲書



蹟筆洲南郷西

大久保「おい、その掛物を懸けかへてくれ。」

書生「何を懸けませう。」

大久保「何でもいゝ。南洲のものを懸けてくれ。」

書生幅を懸けかへる。それは

「盡人事、俟天命。南洲書」

と書した一書幅である。

書生「これでよろしうございますか。」

大久保「う。」

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るい。

西日を受けた障子に庭の松影が黒々と映つてゐる。大久保はじ

つと黙したまゝでゐる。幕。(西郷と大久保)

二四 愛兒の死

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸郷された時、君には光子といふ女の兒があつた。愛らしい生き／＼した子であつたが、

西田幾多郎

哲學者

京都帝國大學名

譽教授

文學博士

明治元年石川縣

金澤市生

東圃

國文學者

藤岡作太郎

東京帝國大學文

科大學助教授

文學博士

石川縣金澤市生

明治四十三年卒

年四十一

小田原
神奈川県小田原
町

昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此の子を喪はれたので、余は前年旅順で戦死した余の弟のことなど思ひ浮かべて、力を盡くして君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになつた己が次女を死なせて、却て君から慰められる身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を踏まなかつた余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲しみを抱きながら、久し振りで相見たのである。單にいつもの舊友に逢ふといふ心持のみではなかつた。然るに手紙では互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向つては何の語も出ず、唯軽く弔辭を交換したまゝであつた。逗留七日、積る話は

文學史
國文學史講話

それからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探つて一束の草稿を持來つて、亡兒の終焉記だから、といつて余に示された。且今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書添へてくれよといふことをも話された。君と余と相遇うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難い悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものではない。言語に表はし得べきものは平凡である、淺薄である、虚偽である。至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも現すことのできない深い同情の流が心の底から底へと

通つて居たのである。余も我が子を亡くした時に深い悲哀の念に堪へなかつた。特に此の悲しみが年と共に消えゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死んだ子の面影を書残した。而して直ちに之を東圃君に贈つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は君の外にないと思つたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別に臨んで君の贈られたその兒の終焉記を行李の底に収めて歸つた。一夜眠られぬまゝに取出して詳かに讀んだ。讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じものかと思つて、感ぜられた。誰か人心には定法がないといふ。同じ盤上に、同じ球を同じ方向に突けば、同一の行路を辿るやうに、余の

心は君の心のやうに動いたのである。回顧すれば、余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた余の姉を喪つたことがある。余はその時生來始めて死別のいかに悲しいかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到つて思ふ儘に泣いた。幼心に、若し余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思つたことを今も記憶してゐる。近くは三十七年の夏、悲惨な旅順の戦に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつた有様、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思が未だ全く消失せないので、又己が愛兒の一人を喪ふやうになつた。骨肉の情何れ疎かなるはないが、特に親子の情は格別である。余は此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。

ドストエフスキ
Dostoyevsky
(1821—1881)
ロシアの小説家

余はこの心から推して、一々君の心を讀むことが出来ると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた、初子は親の愛を専らにするが世の常である。特に幼い女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかな君にして此の子を喪はれた時の感情はどんなであつたらう。亡き我が兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯譯もなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう」といつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた」とか、外に子供もあるから」などいつて、慰めてくれる人もある、併しかういふことで慰められやうもない。ドストエフスキが愛兒を喪つた時、子供はまた生まれるだらう」といつて慰めた人があつた。

ソニヤ
Sonia



—キスフェトスド

氏は之に答へて、どうして他の兒が愛されよう。私に在るのはソニヤだ」といつたといふ事である。親の愛は實に純粹である、其の間一毫も利害得失の念を挟む餘地はない。唯亡兒の倂を思ひ出すにつれて、無限に懐かしく可愛さうで、どうにかして生きてゐてくれ、ばよかつたと思ふのみである。若いものも、老いたものも、死ぬのは人生の常である、死んだのは我が子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は、死んだ者はいかに言つても還

ワシントン、ア
ーヴィング
Washington Irving
(1813—1865)
アメリカ合
衆國の文學
者
スケッチブック
Sketch Book
アーヴィング
の短篇集

らぬから、諦めよ、忘れよ」といふ。併し、これが親に取つては堪へ
難い苦痛である。時はすべての傷を癒すといふのは自然の恵
であつて、一方より見れば大切なことかも知らぬが、一方より見
れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念
を残してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたい
といふのが親の誠である。昔、君と机を並べてワシントン、アー
ヴィングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や苦しみは、
之を忘れ、之を癒したいとおもふが、獨り死別といふ心の疵は、人
目をさけても之を温め、之を抱きたいと思ふ。といふやうな語が
あつた。今誠に此の語が思ひ合はされるのである。折にふれ
物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である、死者に對して
の心づくしである。この悲しみは苦痛といへば誠に苦痛であ

死にし子云々
をんな子のた
めには云々
共に紀貫之の
「土佐日記」に見
えてゐる語

カント
Immanuel Kant
(1724—1804)
獨逸の大學
學者



冷靜に外より見たならば、たわい
ない愚痴と思はれるであらう。
併し余はこの人間の愚痴といふ
ものゝ中に、人情の味のあること
を今度悟つた。カントがいつた
やうに、物には皆値段がある。獨

らう、併し親は此の苦痛を去りたいと思はないのである。
「死にし子顔よかりき。」をんな子のためには親をさなくなりぬ
べし。などと古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である。
り人間は値段以上である、目的其の者である。いかに貴重な物
でも、それは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほ
ど貴い者はない。物は之を償ふことが出来るが、いかにつまら

ゲーテ
Johan Wolfgang
von Goethe
(1749-1832)
詩人 獨逸の大



ぬ人間でも、一の精神スピリットは他の物を以て償ふことは出来ぬ。而してこの人間の絶対的価値といふことが、己が子を喪つたやうな場合にも最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を喪つた時、死者を越えてといつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたであらう。併し人間の仕事は、人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も、究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、たとひ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なものはないからう。徒に高く構へて人

情自然の美を忘れる者は、却てその性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬不前人、不語、金州城外立、斜陽」の句があつて、愈乃木將軍の人格が仰がれるのである。

筆蹟
山川草木轉、荒涼、十里風腥新戰場、征馬不前人、不語、金州城外立、斜陽、石林子

山川草木轉荒涼
十里風腥新戰場
征馬不前人不語
金州城外立斜陽

石林子

乃木希典筆蹟

とにかく、余は今度我が子の果敢ない死といふことによつて、多大の教訓を得た。名利を思つて煩悶の絶間のない心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられた様な心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥から秋の日の様な清く温い光が照らして、すべての人の上に純潔な愛を感じることが出来た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで

愛らしく話したり、歌つたり遊んだりしてゐた者が忽ち消えて
 壺中の白骨となるといふのは如何なる譯であらうか。若し人
 生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬも
 のはない。此處には深い意味がなくてはならぬ。人間の靈的
 生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決すると
 いふのが人生の一大事である。死の事實の前には生は泡沫の
 如くである。死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟
 ることが出来る。(思索と體驗)

師範國文 第一部用 卷四終

師範國文 第一部用 卷四

文部省檢定 師範學校國語教科用
 昭和六年二月四日

大正十四年十月廿七日印
 大正十四年十月三十日發
 大正十五年三月十三日修正再版發行
 昭和五年八月三十一日修正三版發行
 昭和六年一月二十五日修正四版印刷
 昭和六年一月二十八日修正四版發行



卷一	卷二	卷三	卷四、五、六、七、八
金六十九錢	金六十七錢	金六十三錢	金六十一錢
金四十九錢	金四十一錢		

編者 吉田彌平
 發行者 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎
 發行所 東京市神田區通神保町六番地 光風館書店
 印刷者 東京市神田區通神保町六番地 山崎與吉

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候



二学年
加藤
道明



広島大学図書

2000301926



庫

31

926